



Title	沖縄県離島部における幼稚園生活のエスノグラフィー的覚え書き
Author(s)	宮内, 洋
Citation	北海道大學教育學部紀要, 78, 111-146
Issue Date	1999-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29587
Type	departmental bulletin paper
File Information	78_P111-146.pdf



沖縄県離島部における幼稚園生活の エスノグラフィー的覚え書き

宮 内 洋

The Ethnographic Reports of Everyday Life
at a Kindergarten in the Islands of Okinawa

MIYAUCHI Hiroshi

目 次

0) はじめに	111
1) 方法	113
2) 島々の幼稚園	114
2-1) 沖縄島の幼稚園	114
2-2) 地域の分類	116
2-3) 宮古諸島の幼稚園	117
2-3-1) 多良間幼稚園	117
2-4) 大東諸島の幼稚園	121
2-4-1) 南大東幼稚園	121
2-4-2) 北大東幼稚園	125
2-5) 慶良間諸島の幼稚園	129
2-5-1) 渡嘉敷幼稚園	129
2-5-2) 粟国幼稚園	132
3) 島に共通する問題	137
4) おわりに	140

0) はじめに

「鳥島」は入っているか。

何と切ない響きのこもった一文だろうか。このことばに自らの視野を再び見つめ直した研究者がどれくらいいたことだろう。

秒刻みで動いていくかのような現代の社会科学においては、もはや「過去」のことばになった感さえあるかもしれないこの問いかけは、歴史学者の鹿野政直氏によって発せられた（鹿野：1988）。研究を行う者ならば心を揺さぶられざるを得ない急所を突くような見事な一文ではないだろうか。この問いかけは、よく知られているように、もともとは作家の島尾敏雄氏のことばで

ある。鹿野氏は、島尾氏が1962年6月13日に鹿児島県大島郡で行った講演「私の見た奄美」を反芻しながら、そのことば一つひとつを自らの専門である歴史学に重ね合わせることによって、自らの研究を厳しいまなざしで見つめ直そうとした。再び繰り返すと、島尾氏は1962年における日本地図上の省略を嘆いた後で、奄美を描く地図において鳥島（正確には「硫黄鳥島」）を省いてしまう意識の問題性を訴える。つまり、日本地図の大半は当時種子島や屋久島が南限であり、それ以南は省略されていた。しかも、そのこと自体が問題にされることすらない。同様に、奄美の地図を描く場合においても、徳之島の西方およそ65kmにある鳥島を省略することが問題視されないことの歪さを指摘する。そして、地理上の問題のみならず、歴史的・社会的な視野にまで拡げた、「日本の歴史の中であるいは日本人の中で、はじつこのほうだから、落としていいというふうな考え方を是正して行かなければならないと考えるわけです」（鹿野：1988, 11頁）という島尾氏の主張を引用した後に、鹿野氏は自らに問うのである。

「わたくしたちの歴史学には、はたして『鳥島』は入っているか」と。

この一文を目にすると、他者を記述する者ならば誰もが戸惑い、困惑し、自らを振り返ることだろう。あるいは、「そんなものはない」とある種の開き直りを見せるか、このような厄介な一文は目に入らなかったことにして心の奥深くに抑圧してしまうかもしれない。最終的にはどちらの反応を示すにせよ、私たちが一度は困惑するのは、私たち全員が幾つもの「鳥島」を心の奥底に抱え込んでしまっているからだ。「鳥島」とはこの場合、当然メタファーとしての「鳥島」である。すなわち、存在するにもかかわらず、研究の視角では見えなかった事象、あるいは研究の視野に入れられてこなかった事象（さらに言えば、故意に捨象してきた事象）とでも言えば良いだろうか。

鹿野氏の問いかけを直接的に受けたわけではないだろうが、以降社会科学の領域では幾つもの「鳥島」が発見され続けてきたし、今なお発見され続けている。喜ぶべきどころか悲しむべきことに、「鳥島」の発見とその報告は祝福されることなく、しかも「鳥島」の発見者共々再び闇に葬り去られることがあったかもしれないが、確かに発見され続けている。

ところで、先の島尾氏が「ヤポネシア」論を魅惑的に語っていた時期、日本国は高度経済成長の真只中にあった。その後驚異の右上がりの成長は次第に失速していったとはいえ、当時の日本国のとどまることを知らぬかのような経済成長は他の先進諸国にとっては一つのミステリーだったようだ。その原因究明の一つの手だてとして、日本国内の教育制度と教育機関には国外からの視線が多く集まった。国外からの視線はさらに内部へと射し込んだ。国外の研究者たちが日本国内の教育機関内部に参入して、次々とフィールドワークを行ったのだ。その成果として、良質のエスノグラフィーが産み出された（例えば Cummings : 1980, Rohlen : 1983, Hendry : 1986, Peak : 1991, Lewis : 1995 など）。中でも幼稚園はその最前線でもあった。「日本的集団主義」を内面化させる教育機関の最前線として目されていたからだ。これらの研究の鳥瞰は別の機会に譲るが、現在の時点で結城恵氏の労作『幼稚園で子どもはどう育つか』によって、ある一定の地点に到達したように見える。

さて、文頭の一文に戻りたい。鹿野氏の「『鳥島』は入っているか」という問いかけを私たち幼稚園をフィールドとする者はどのように受けとめれば良いのだろうか。

つまり、私たちの幼稚園研究には、はたして『鳥島』は入っているか。

本稿は、この問いかけに向き合おうとした、ささやかな試みの第一歩である。具体的には、沖

縄島の離島部にある5つの幼稚園にうかがった時の印象記に過ぎない。以前の拙稿(宮内:1995b)と同じく、情報の伝達を最優先した報告である。当然のことながら、本稿も幾つもの「鳥島」を内部に抱え込んだままの報告であることを断っておきたい。

1) 方 法

まずは身近な一つのエピソードから始めたい。筆者の親しい友人は沖縄に関する研究を行ってきたが、以前ある学会において報告した際に以下のような質問をフロアから受けたという。「君は沖縄に行ったことがあるか?」と。いかようにも解釈できるエピソードであるが、ある地域を対象にした研究はその地域と研究者との心理的及び身体的な距離が問題とされることには間違いないさそうである。とくにフィールドワークについては、さらに詳細な説明が必要とされる。最初にこれらについて答えておきたい。

筆者はこれまで、自らが生活する北海道を中心にフィールドワークを行ってきた。北海道からおよそ2000km離れた沖縄県を訪れるのは前回のフィールドワーク(1994年6月23日を起点として)に続き、2度目のことである。それ以外に沖縄に足を踏み入れたことはない。今回のフィールドワークにおいては、前回のフィールドワーク時に調査に協力していただいた方々にお世話になった。フィールドワークを行う者にとっては、フィールドの人たちとの関係はその場限りではなく、その後も続き、コラボレーションを行う関係になる場合もあるのである。この点が「ワンショット・ケース・スタディ」の社会調査とは大いに異なる点であると思われる。

今回のフィールドワークは、沖縄県内の幼稚園の実態調査を行う第一段階である。沖縄県の幼稚園の概観を把握するにあたり、離島部の幼稚園から始めた。沖縄県は地域内すべてが島嶼からなる島嶼社会である。このために、島としての特性がより鮮明に出るのではないかと素朴に考え、島に一つだけ存在する幼稚園を集中的に訪問することとした。

1992年の時点で沖縄県内において有人島は48島ある(中山:1992)。そのうち島内に幼稚園が一園のみの離島は、筆者が調べた限りでは16島であった(ただし、本稿の主旨から、沖縄島とすでに陸続きになっている島を除いた)。すなわち、沖縄県には一つの島の中に一園のみ存在しているといった幼稚園が16園あることになるのだが、筆者のわずか2週間余りのフィールドワークにおいては5つの園を訪れるのが限界であった。

なぜ筆者は、これほど少ない数の幼稚園しか訪問できなかったのだろうか。筆者がフィールドワークを実施した1999年2月後半の沖縄は「オフシーズン」と言われているが、実際には避寒のために訪れる高齢者の方々を中心にしたツアーが非常に多く、大学受験等と相俟って、沖縄島中心部のホテルには空室はない状態が続いていた。このような現象は今年のみに見られる突発的な現象ではなく、例年の常態だという。大半が本州から沖縄島に訪れる観光客も、石垣島や宮古島には足を伸ばすことはあっても、それ以外の島にはほとんど行くことはない。これより、その他の島にアクセスする交通手段は夏の「観光シーズン」よりも大幅に減少してしまう。だから、目的のすべての幼稚園に伺うということはほぼ不可能となった。その少ない交通手段を駆使して可能な限り一園でも多く伺うことができるように計画してはみたが、各々の島行きの軽飛行機(定員9~39席)は満席続きで予約が取れなかった。これは筆者の島々の文化についての無知にも由来する。この時期、島々の多くは正月を迎えていたのだ。旧暦の正月を故郷で祝うために、故郷

の島に帰省する人たちで少ない交通手段は塞がっていたのだった。日本国中新暦によって動いているということが、疑うことすらないほどの常識として自らに染み着いてしまっていることを思い知らされた。ここに自らの文化が当然という「自文化中心主義」の傲慢さを筆者は自らの中に見てとった。他にも、島々の建築現場に出稼ぎに来ている人たちの往復で数少ないアクセス手段は空きのない状態が続いていた。このように沖縄県に足を踏み入れてから思い通りに動くことができたわけではなかったので、結局5つの幼稚園に伺うことができたのみだった。以上がその理由である。

さて次に、幼稚園への参入経路を露にしておきたい。筆者は幼稚園に直接お電話してから、直接伺った。だが、北大東島のみは村役場に行って調査許可のための書類を書くなど、教育委員会を経由して幼稚園に入らせていただいた。それ以外の島に関しては、当該幼稚園の先生方以外の経路は直接的にはしてはいない。どの島でも卒業論文のために調査に来た大学生と認識されていたことが多かった。わざとそのような演じていたわけではなく、フィールドワークのために身分を偽っていたわけでもなかったのだが、そのように見られることが多かった。これは以前記したような綿のシャツにジーンズといったラフな服装であったためなのだろうか⁽¹⁾。いずれの島においても、建築現場に働きに来ているか、あるいは一時の帰省という目的以外で島を訪れていたのは、筆者以外にはほとんどいなかった。

最後に、それぞれの幼稚園内では小型ビデオカメラによって幼稚園生活を撮影し続けた。これは以前の筆者のフィールドワークとまったく同じように行われた（詳細は宮内洋:1998a & 1998b）。つまり、ビデオカメラを固定して教室を撮影するのではなく、筆者が持って動きながら撮影するという方法をとった⁽²⁾。

2) 島々の幼稚園

2-1) 沖縄島の幼稚園

まず各々の5つの島の幼稚園について述べる前に、沖縄島の幼稚園について述べておきたい。よく知られているように、沖縄県は幼稚園の就園率が他の都道府県と比して格段に高い（グラフ1参照）。1893年に那覇尋常高等小学校女子部に幼児30余名が入園したことが沖縄の幼児保育施設の始まりとされているが、それから1945年までの50年近くの間設立された幼稚園は7園のみで、幼稚園就園率は国内でもっとも低いものだった（宜保:1985）。だが、近年は打って変わり、少なくともここ15年間は就園率トップの座を維持している。

これはなぜだろうか。沖縄島で生活する人たちにはあまりにも自明過ぎて「問題」にさえならないようだが、筆者のような他の地域に生活するものにとっては不思議でならない。今回のフィールドワークにおいて沖縄島内で生活する多くの方々にお聞きすることによって明らかになったのだが、他県と比して、きわめて特徴的な点が3点ある。

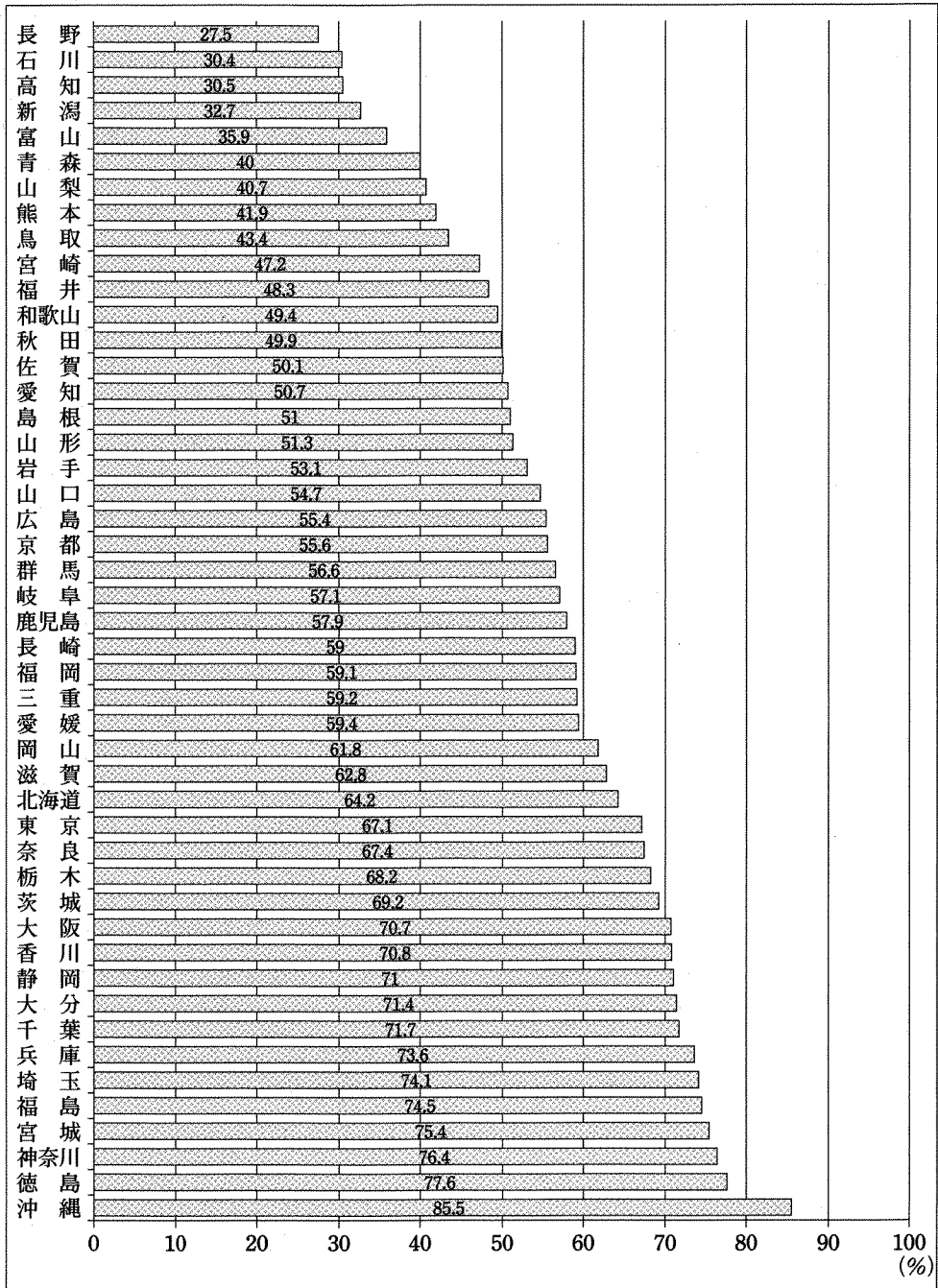
- ① 沖縄島内の幼稚園の大半は公立である。
- ② 沖縄島内の幼稚園の大半が1年保育である。
- ③ 沖縄島内の幼稚園は小学校の敷地内にある場合が多い。

少し具体的に説明しておこう。

まず①についてであるが、1997年度における沖縄県内の幼稚園数は281園であり、このうち公

立幼稚園は244園であったので、県内において公立幼稚園の占める割合は86.8%であった。そのうち沖縄島以外の島にある幼稚園は75園であるが、そのうち公立幼稚園は72園であり、公立幼稚園の占める割合は96%とさらに高い（沖縄県教育委員会調べ）。

グラフ1 1998年度都道府県別幼稚園就園率（5歳児）



* 学校基本調査報告書より筆者作成

次に②に関しては、資料の関係上、公立幼稚園のみに限られる上に、大まかな値しか述べる事ができないが、その傾向だけでも記しておきたい。1998年度において、沖縄県内における1年保育の公立幼稚園の占める割合はおよそ8割であるが、沖縄島だけに限ると1年保育の公立幼稚園の占める割合は9割を超え、沖縄島においては1年保育がいかに主流をなしているかということがわかる。(同調べ)。

最後の③に関しては、具体的な数値は挙げる事ができない。少なくとも沖縄島内の幼稚園を筆者が回った限りにおいては、そのように言える可能性は高い。しかし、再考の余地は多分にあるだろう。

以上より、少々乱暴な結論を呈示してしまうと、少なくとも沖縄島内において幼稚園は小学校の一部なのである。だからこそ、沖縄県においては、以上のような高い就園率となるのではないだろうか。それは以下のようなエピソードにもよく表われている。両親共に沖縄県出身で、なおかつ琉球大学を卒業しているという、沖縄県内ではきわめてエリートな両親のもとに生まれた20代の男性は、沖縄島では珍しく3年保育の私立幼稚園に通園していた。しかし、年長クラスになる4月には地元の公立幼稚園に移らされたというのだ。彼にとってはそれは不思議なことではなく、当然のことだという。つまり、地元の小学校に通うことになるのだから、同じ敷地内にある公立幼稚園に通わなければ、クラスの誰も知らないまま小学校に入学しなければならない羽目に陥ることになり、それは非常に恐ろしいことだったというのだ。ここで見られるように、沖縄島において幼稚園は小学校入学以前に必ず通らなければならない前段階として位置付けられているように思われる。このことは、沖縄県では公立幼稚園の管轄が教育庁の「義務教育課」であることにも端的に表われていないだろうか。まさに、沖縄県では幼稚園は「義務教育」の一環なのである。少なくとも島民の意識上においてはそのように位置付けられていると筆者には見えた。それを表すかのようなもう一つのエピソードも添えておこう。先の男性が小学校一年のとき、クラスに先生の言うことをまったく聞かない児童がいたらしい。クラス担任の教師は、彼に対してかなり手を焼いていたらしいが、彼がいないときに先生は以下のような話をしたという。「彼は幼稚園を出ていないから、皆と同じようにできないんだよ」と。このエピソードを話してくれた先の男性は、そのときに子ども心にやはり幼稚園を出て良かったと思ったという。このように幼稚園を出ていないことが負の経歴として機能してしまうほど、沖縄島内の幼稚園は「子どもとして当り前」のルートなのだと言えよう。

この沖縄島の状況は、以下で述べる5つの島とはやや状況が異なる。各々の島の幼稚園に関する箇所で見えていただきたいが、あらかじめ相違点を呈示しておこう。幼稚園の「義務教育」機関としての機能は各々の島の方がより明確になっている。各々の幼稚園はほぼ100%に近い就園率である。だが、1年保育の幼稚園は一つもない。以下の離島の5つの幼稚園はすべて2年保育であり、さらに現在3年保育が計画されている(3年保育は現在のところ座間味幼稚園のみ)。この沖縄島との乖離は、少なくとも離島の幼稚園が、沖縄島の幼稚園とは異なった原理で動いていることを示唆していると思われる。

2-2) 地域の種類

以降5つの幼稚園について具体的に記述していくが、その前に沖縄県内の島嶼群をあらかじめ区分しておく。

まず本稿の標題にも掲げられ、先から繰り返し用いられている「離島」とはいかなる島なので

あろうか⁽³⁾。ここで、ある一定の定義を措定しておきたい。

「離島」と言えば、1953年に制定された離島振興法で定められた官庁用語であり、その後一般化したものと言われている（河地：1968）。つまり、具体的には佐渡島以下の面積の島が公的には「離島」なのである。では、沖縄島はどうであろうか。面積が1183km²の沖縄島は、面積857km²の佐渡島よりも広い。日本国内では本州、北海道、九州、四国に次いで、5番目に大きい島なのである。この規定では、沖縄県においては沖縄島以外がすべて「離島」ということになる。沖縄島に次いで広い西表島でも面積は288km²であるからだ。確かに明治維新後、「ヤマト」に対する「本土」という呼称と連動するように、沖縄島は「本島」と称され始めた（中山：1974）。そのことも沖縄県において、他の島々は「離島」と規定してしまう力を加速させてしてしまうことだろう。だが、離島振興法による規定は「ヤマト」という沖縄の外の視点からのカテゴリー化である。ここでは、沖縄の島嶼内部の視点から見ていきたい。例えば伊良部島では、沖縄島のことを「ウチナー」と称し、宮古島を「親島」と称していたという（中山：1974、116頁）。同時に宮古島周辺の島を「パナリジマ（離島）」と称しているという（同）。ここから、宮古諸島圏内における一つの地域認識の体系が看取できよう。つまり、沖縄県内全域において一層の文化で貫かれているとは言えはしない。そのような視点からすると、少なくともかつて政治的には独立していた宮古島と石垣島は「離島」とはやや呼び難い。よって、本稿では沖縄島、宮古島、石垣島を除く島であり、かつそれら3島と現在地続きになってはいない島と措定しておきたい。

ここから考えてみると、沖縄県内の島嶼群は少なくとも歴史的経緯から、宮古島を中心とする宮古諸島と石垣島を中心とする八重山諸島が、沖縄島とは異なった地域としての区分も可能となるであろう。人文地理学の領域においても、沖縄島を中心とする沖縄諸島、そして宮古諸島、八重山諸島という三つの島嶼群に分けるのが一般的な区分の仕方らしい（中山：1992）。だが、この区分においては、沖縄諸島としてまとめてしまうには地理的にも文化的にも当てはまらない島嶼がある。沖縄島の東部約380kmに位置する沖大東島、北大東島、南大東島の3島である。富山県が作成した日本列島を逆さまにした地図を見ると、日本海も東シナ海も大小様々な島嶼群に囲まれた湖のように見える。とくに琉球列島は「琉球弧」と呼ばれるほどあって、東シナ海と呼ばれる大きな湖を取り囲むように連なっている。この大きな弧から逸脱して、太平洋に位置するのが先の3島である。そこで、沖縄諸島とは別に大東諸島という区分もしばしば用いられているが、本稿においても採用したい。さらに、沖縄諸島を細分化する呼称が幾つも存在する。そのもっとも知られている区分の一つに、沖縄島の西近辺の島嶼を慶良間諸島と呼ぶことがある。本稿もそれにならいたい。

以上より、本稿は沖縄諸島のうち慶良間諸島の2島、大東諸島の2島、宮古諸島の1島にある各々の幼稚園を対象としたものであるとも言える。

2-3) 宮古諸島の幼稚園

2-3-1) 多良間幼稚園

a) 島の様子

多良間幼稚園のある多良間島は、宮古島と石垣島の間より宮古島寄りに位置している、沖縄島の人々でも知らない人が少なくはないほど観光とはまったく無縁の島である。たとえ島名を知っていても場所を答えることができる人はさらに少ないようだった。面積は19.73km²であるが、

ほぼ円のかたちをした島であるから島の中に入ってしまうと、島にいるという感覚はほとんど消えてしまうようだ。周囲を見渡しても、山も小高い丘もなく、平野部にサトウキビ畑がえんえんと続いていた。本州において梅雨時に蛙の鳴き声がうるさくて眠れぬ夜があるように、ちょうどそういう時期なのか夜にはやもりの鳴き声が島中に響き渡っていた。島には1350人（男性741人、女性609人）の人たちが生活している（1999年2月現在）⁽⁴⁾。民俗芸能が継承されているということでも知られ、とくに琉球王朝文化の流れをくむといわれる「八月踊り」（3日間繰り広げられる）は貴重な伝統芸能として有名である⁽⁵⁾。この八月踊りは重要無形文化財にも指定されている。

b) 島の幼稚園

1) 概観

多良間幼稚園は住宅が集まっている島の北部にある。歩いて数分の場所に村役場、公民館、図書館、スーパーマーケット、そして島で唯一のカード式公衆電話があった。幼稚園は小学校の敷地内にある平屋建ての建物で、玄関から左右に二つの教室があり、右が年少組の教室で、左が年長組の教室だった。玄関の真正面の部屋は職員室になっている。

2) 沿革

多良間幼稚園の前身は1939年に発足した私立「愛児園」である。1941年に「愛稚園」と改称し、翌1942年には再び「幼稚園」と改称した。1945年には空襲等のために休園となり、職員も自然退職となった。終戦後1946年には園舎がないままに開園し、その後中学校の一部を使用して保育を行ってきたが、1967年に現在の多良間村立多良間幼稚園となった。1978年にPTAが結成し、1980年に小学校の敷地内に新しい園舎が建てられた。1984年から2年保育となり、島内の保育所の4歳児がそのまま移行した。現在の年長組の担任の島袋先生はこのときの職員増に合わせて前年に赴任された。同じく、この1983年から現在のようなミルク給食が始まった。

3) クラス形態

多良間幼稚園は2年保育で、現在年長組と年少組の計2クラスある。年少組は15人（男児8人／女児7人）、年長組は19人（男児9人／女児10人）の計34人の園児が在籍していた（1999年2月現在）。一時は1クラスが30人近くもいたことがあったが、徐々に減少してきているという。

各々のクラスは、二人の女性教師が担任している。まず年長組は1983年に赴任された多良間島出身の島袋先生が担任されており、年少組は1998年度に来られた先生が担任しておられる。だが、かの女は新人ではない。もともと島の保育所の所長をなさっていた方で、今回は20年振りの幼稚園への復帰だということだった。

c) 幼稚園生活

ほぼ毎日の幼稚園生活を表にまとめると、以下のようになる。表の下には、筆者の視点から見た幼稚園の一日を、エスノグラフィーとして記してみた。以降の島でも同様に記した。

08:00	登園開始（09:00には全員が揃う）～自由遊び
10:30	全員での活動
11:00	おやつ時間（クラス毎）

～クラス活動～紙芝居

12:00 降園

*ただし、水曜のみは弁当持参で登園し、お弁当の時間があるので降園は遅くなる。

*

*

多良間小学校の門を抜けて、多良間小学校横の多良間幼稚園へと向かった。登園開始の8時を過ぎた頃に幼稚園に着いた。すでに校庭で遊んでいる園児たちもちらほら見られた。園舎の中にいた園児たちは、突然の訪問者に興味を示して、次から次へと玄関に出てきた。そして筆者が何者なのか確かめていた。だが、筆者がいかなる者であるのか、園児たちが理解していたかどうかはわからない。

幼稚園に着いた園児はまず藤色の帽子を脱ぎ、背負ったランドセル型の黄色の鞆を自分専用の棚にしまう。そして、紺色の制服を所定のハンガーにかける。その後は、木の棒で派手にちゃんばらをしたり、追いかっこをしたり、非常に活動的に遊んでいた。朝からぼーっとしている子はあまり見かけなかった。勢い余ってけんかに発展し、泣いてしまう園児も少なくなかった。筆者も頭から肩から入れ替わり立ち替わり、何人もの園児たちに登頂されていた。

筆者が訪れた1999年2月18日は、いつもの幼稚園の生活とは著しく異なっていたようだ。年少組の担任が研修のためにお休みだったために、30人強の園児たちを年長組の担任が一人で見なくてはならなかったのだ。このように、この日の幼稚園生活は筆者の闖入もあり、きわめて非日常的だったかもしれない。

はるばる北海道からやって来た筆者のためにと、多良間島の貴重な八月踊りを園児たちが披露してくれるということになった。だが、双子が来ないと演じられないと園児たちは言う。9時近くになってようやく待望の双子の男児がやって来て、八月踊りの準備が始められた。筆者は教室の隅でわくわくしながら小型ビデオカメラの録画ボタンを押した。やや長い待ち時間の後、教室の真ん中のスペースがにわかに舞台となった。ラジカセからは踊りのための民謡が流れ始めた。

プラスチックのパケツに段ボール紙を張り付けてつくった兜を勇ましくかぶり、モップの刀を振り回す男児が飛び跳ねながら庭の方から出てきた。八月踊りをまったく知らぬ筆者は何が起こるのか、非常に楽しみにしていた。しかし、男児6人は飛び跳ねながら出てきては、すぐに又教室から出て行ってしまふ。最初は恥ずかしいのかと思っていたが、ずっとこの調子だった。中央部に出て来ては又出て行ってしまふのだ。これが祭なのかわからず、狐に摘まれたような感じで見ていた。男児6人は途中で叩き合ったり、蹴ったりとふざけているように見えた。ポンポンを改良してつくった獅子（多良間島では「スースー」という場合が多い）が出てきた時には見応えがあった。それを別の男児が棒でやっつけているような情景はようやく解釈可能なシーンが現れたようで嬉しかった。

それにしても、筆者にとっては謎だらけだった。なぜ他の園児たちは見ているだけで、特定の男児6人しか踊っていないのか。筆者の膝の上に乗ったり、もたれかかっている女兒たちに尋ねてみた。

「皆で踊らんの?」「踊らん。」

「女の子は踊らんの?」「女の子は踊ったらダメ。」

どうやら、このような決まりらしい⁽⁶⁾。

後で多良間島の風物誌を描いたビデオを園児たちと一緒に見せてもらったのだが、そこで映し出されている八月踊りを初めて見て、彼らが彼らなりにコピーしていることがわかった。少しは

ふざけていた部分があったにせよ、しっかりと再現されていることがわかった。先ほど感じた不思議さは、筆者の保持している祭や踊りの概念が貧しかったことに由来していた。八月踊りには精巧な舞台があり、そこで次々と様々な踊りが演じられて、その後演者は舞台奥に引っ込むのだ。祭や踊りというよりも、筆者には「能」に近い感じがした。酔っ払ってしまった人のまねも含めて、彼らは優れた演者であることが後にわかったのだ。非常に興味深かったのは、踊る彼らの横で、一人の男児がサランラップの芯棒を利用して作ったおもちゃで覗いていたことだった。恐らく島の「伝統芸能」をビデオカメラで撮影する人を演じているのだろう。筆者はビデオカメラでその男児を撮りながら、彼の豊かな発想に驚かされながらも、自らが揶揄されているような複雑な気持ちを味わっていた。

一通り終わったのか、9時42分に先生から「はい、もう終わり」との声がかかり、「片付けましょう」というBGMが流された。

音楽が変わり、5列に並んだ園児たちはその音楽に合わせて歌いながら踊る。音楽が終わると、先生は「トントンまーえ、トントンまーえ」と声をかけながら、前の園児と一定の距離を取らせた。そしてその後、園児たちは一斉に声を合わせて朝の挨拶をして、座った。

「先生おはようございます。皆さんおはようございます。今日も仲良く遊びましょうね。」

9時54分、座った園児たちに対して、先生は筆者の紹介をした。そして、筆者は先生に促されて園児たちの前で北海道についての話をすることになった。雪についてなど様々な話をしたつもりだったが、中には北海道なんかよりも沖縄に行きたいと主張する園児もいて、あまり面白くはなかったようだ。今度は筆者が多良間島について教えてもらう番だ。多良間島で美味しいものは何かと尋ねると、砂糖や鮪などといった名産物から、焼そばといった答えまで次から次へと出された。とにかく年長組の男児を中心にとても元気が良い。ふざけ合ったり、叩き合いが始まったりと收拾がつかなくなった時に、先生が助け船を出して下さった。皆でくっついて座り、隣の人の膝をたたくというダンスに切り替えて下さったのだ。

10時18分、再び先ほどの音楽が流れて園児たちは先生と一緒に踊る。次も、音楽に合わせて全身を使った体操だった。その後は3曲連続で、座ったままの状態、手だけで踊るものだった。曲毎にリズムが緩やかに移行しているようだ。

10時33分、先生が「おやつを用意」と声をかけた。全員が一斉に手を洗うために、教室を出たところにある手洗い所に向かった。手を洗い終わった一人の女児がほうきで教室を掃いていた。他の園児たちは筆者の所にやって来て、筆者が持っていたビデオカメラのレンズに次々とキスをするなど再び收拾がつかない状態になってしまった。

おやつの前に、年長組によってオペレッタが上演されることになった。年少組は観客だ。園児たちはカエル、モグラ、ウサギというそれぞれの役に分かれて、役に応じた帽子をかぶって準備した。途中ズボンの降ろし合いというアドリブもあったが、カセットテープの音に合わせて演じてくれた。

10時50分に先生が紙パックの牛乳を持ってきて、おやつの時間となった。園児たちは大きな輪になって座ることになった。牛乳が配られた後、お当番さんが皆に問いかける。

「おやつを用意はいいですか。」

「いいですよ。」それ以外の園児たちは答える。

「手を合わせて、ご挨拶どうぞ。」

お当番さんのかけ声の後に、園児たちは大きな声で言った。

「おいしいおやつをいただきます。」

これだけではない。全員で声を合わせてこう続けたのだ。

「お当番さんどうぞ召し上がれ。」

そしてお当番さんは「いただきます。」と言ってから牛乳を飲み始める。元気の良い園児たちは一気に牛乳を飲み干した。

おやつ後は、多良間島のビデオを全員で観ることになった。園児たちの祖父や祖母、父母や兄姉がいたるシーンで登場していた。その度毎に教室は沸いた。

11時近くになったので、降園の準備だ。帽子、制服、鞆を身につけた園児から教室の中央に座る。全員が揃ってから、先生は今日の紙芝居を始めた。「歯医者だってへっちゃらだ」というものだった。今日一日の中で園児たちがもっとも静かな時間だった。紙芝居の後、先生が歯医者に通っている子を数えると、結構多くの園児が通院していた。正午ちょうどに「エリーゼのために」が突然どこからともなく流れてくる。

12時3分に「バイバイバイでまたあした」という曲が流された後、今日のお当番さんが前に出てきた。先生は「はい、気をつけー。お帰りのご挨拶ですよー。」と園児たちに声をかけた。

全員が声を揃えて言った。

「お当番さん、ありがとうございました。」

男女二人のお当番さんは「どういたしまして。」と答えた後で、「明日のお当番さんもがんばってください。男の子はSくん、女の子はMさんです。」と言った。そして続ける。

「お帰りの用意はいいですか。」

「いいですよ。」

他の園児たち全員は大きな声で答えた後、お当番さんは続けて言う。

「お帰りのご挨拶、どうぞ。」

全員で声を合わせる。

「先生さようなら、皆さんさようなら。明日も仲良く遊びましょうね。ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ。」

最後は隣にいる人の手をぎゅっと握るのだけれども、省略して3回ジャンプするだけの園児も見られた。

このことばを言い終えると、園児たちは一斉に教室から飛び出して行った。

2-4) 大東諸島の幼稚園

2-4-1) 南大東幼稚園

a) 島の様子

南大東幼稚園のある南大東島は、沖縄島の東に372kmの地点にある世界的にも珍しい地形の島である。面積は30.57km²であり、島の周囲は高さ10~20mの絶壁に囲まれている。言わば、島全体が大きなすり鉢のような地形となっている。漂流した時の食糧として山羊などが放されたことはあったが、八丈島出身の玉置半右衛門を中心とした一団が1899（明治33）年から島の開拓を行う以前はまったくの無人島だったと言われている。ゆえに今年は島が開けてちょうど100周年ということになる。現在は1499人（男862人／女637人）の人たちが島で生活している（1999年2月現在）。

島の主な産業は、近年はじゃがいもを栽培し始めてはいるが、やはりサトウキビである。筆者

が訪れた時期はちょうどサトウキビの刈り入れの時期だった。毎年1～4月くらいまでは製糖期であり、現在のような機械化が進んでいない頃は大勢の人手を必要としていた。1977年までは外国（主に台湾）からも200人近くの人たちが出稼ぎに来ていたが、その後は外国からは一人も来てはいない。この時期は製糖工場もフル稼働であり、その排出された糟のせいだと言われているが、蠅が大量に発生していた。この時期は毎年大量の蠅に悩まされる季節だと島の人たちは語っていた。

b) 島の幼稚園

1) 概観

南大東幼稚園は村役場や農協と同じく、島の西部に位置している。この一帯に島の大半の住宅と施設が集まっている。サトウキビ農家の一部は自らの畑の敷地内に住居を構えているが、その数は少ない。

幼稚園は南大東小中学校と同じ敷地内にある。ウサギの絵などが描かれた低い塀の先には、アーチ状の入り口が見える。アーチをくぐり、平屋建ての幼稚園内に入ると、左手すぐに職員室があり、右前方には位切られてできた園児たちが絵本を読むスペースがある。その先には広いホールが広がっており、それに面して年長組と年少組の教室が隣り合わせにある。幼稚園の園庭から一段降りたところには、高く茂った松林が広がっている。その中央には、1996年7月に「教育立村」宣言したことを記念した碑が建てられていた。

2) 沿革

南大東幼稚園は1979年4月に開園した。当時はまだ園舎ができておらず、小中学校の校舎において教育を行っていたが、翌1980年4月に待望の園舎が完成した。1994年4月に現在の主任である大城先生が就任される。1996年4月にはもう一人の教師である山下先生が就任される。お二人とも南大東島の出身ではなく沖縄島出身であるが、島に赴任された後で地元の男性と結婚されている。1997年9月からネイティブ・スピーカーによる英語教室が始まった。以降、毎週月曜日に半時間程度、英語教室が行われている。

3) クラス形態

南大東幼稚園は2年保育である。現在は上記の女性教師二人が年少組の「さくら」組と年長組の「たんぼぼ」組をそれぞれ担任している。現在はハンディキャップを背負った園児のために補助教員として一人の女性が午前中のみ勤務しているので⁽⁷⁾、園児たちは3人の先生がいると認知している。「さくら」組は24人（男児12人／女児12人）、「たんぼぼ」組は22人（男児13人／女児9人）の園児で構成されており、計46人の園児が在籍していた（1999年2月現在）。ちなみに、今回伺った5園の中では園児数をもっとも多い幼稚園であった。筆者が知る限り、沖縄県内の離島部においてはもっとも規模の大きい幼稚園だと思われる。

c) 幼稚園生活

- 08:00 登園～朝の活動～自由遊び
- 10:30 片付け～当番活動
- 11:00 ミルク給食～歯磨き

11:30 降園準備～絵本読み

12:00 降園

*ただし、水曜日と金曜日は弁当持参の「お弁当会」があるので、降園は13時となる。

*

*

朝8時頃から園児たちは家族の人などに送ってもらい、幼稚園に姿を見せ始める。筆者が訪れた1999年2月25日は朝から霧雨が路面を濡らしたが、園児たちが顔を揃える頃になると、すっかり路面も乾き、昼からは雲一つない空になった。

園児たちは銘々幼稚園にやってくると、まず自らの教室に入り、黄色いお揃いの鞆を自分専用の棚にしまい、ピンク色のお揃いの帽子もしまう。それから、「えんぶく」と呼ばれる制服を決められた場所のハンガーにかける。紺色の制服の左胸には「南だいとう」と記されてある。「おたより帳」をそれぞれの担任の先生に出すことも忘れてはならない毎日の決まり事だ。

それさえ済ませば、後は園舎の中でも園庭でも自由に好きなことをしても良いのだ。筆者がビデオカメラを構えると、イヤリングをつけた女兒がうんていの上でフラダンスを踊ってくれた。広いホールでは「おままごと」をする3人の男児がいた。「おままごと遊び」と言えば良いのだろうか。厨房のセットのような場所があり、そこで男児たちはブロックを食材に見立てて、フライパンのおもちゃで調理するまねをしていた。バックにはCDラジカセから流れる童謡を中心にした音楽がずっと流れていた。

園児たちは思い思いの場所でそれぞれのことをしていた。ホール内の一段高いステージ上に立派に何段も雛人形が飾られてある雛段を背に、なわとびやホッピングに興じていた女兒たちはもう汗びっしょりだ。

ほぼ全員の園児が登園して各々で好きなことをしていた9時ちょうど、見知らぬお兄さんやお姉さんがやって来た。この日は筆者が訪れた以外に、日常の幼稚園とは異なる点があった。愛知教育大学の学生グループが幼稚園に遊びに来たのだ。彼／かの女たちは南大東島に体育会系のサークルとして数日前に訪れ、島の人たちと交流していた。この日は園児たちに遊戯を教えるという目的で、幼稚園にやって来ていた。園児たちの視点からすると、筆者が訪れた当日は、知らないお兄さんやお姉さんたちがたくさんやって来て、いっぱい遊んでくれるというさぞ不思議な日だったことだろう。

3人の先生方、愛知教育大学の学生グループ一人ひとりと、園児たちは自然に各々の数人のグループに分かれていった。まるで図ったかのような。男性の学生は結果的にそれぞれ身体をフルに使った遊びを行い、女性の学生は腰を落着けた遊びを行っていた。

筆者は、トイレを我慢していると思われる男児に声をかけてみた。彼は家に帰るまでトイレは我慢するのだという。幼稚園のトイレには行きたくないのだという。筆者は試しに幼稚園のトイレに行ってみた。トイレは園舎内ではなく、4mほど離れた別棟としてある。タイル張りの水洗トイレであるが、少し薄暗いと感じる子もいるかもしれない。個室のドアには「トントンはいますか」と書かれたポスターが張られてある。園児たちの降園後、先生にこのことについてうかがってみると、トイレに蚊が発生することがあり（蚊取り線香があったのはそのせいだった）、それをこわがる子も少しいるようだという。

9時半頃、筆者も大きな水槽が置かれてある玄関を背にして、園舎の外に出てみた。ジャングルジムやブランコはもちろんのこと、園庭の木には数人の男児と女兒が登っていた。園庭だけではない。園庭の外の松林も園児たちにとっては園庭同然だ。本幼稚園では、その外側の車道には

出てはいけないルールになっているから、松林で遊んでもまったく問題ないわけだ。裸足で走り回る園児も少なくない。

10時17分、先生が片付けの時間だと知らせると、園児たちは即座に片付け始める。非常に素直に先生に従っているように見える。筆者が園舎内に入った頃には、「上ばき」に履き変えた園児たちは自分の教室に戻り、すでに三角座りをして4列に並んでいた。先生から、筆者と大学生グループの紹介があり、大学生グループによる遊戯へと移行した。トイレに行きたい人はトイレに行くようにとの先生からの話があり、再び園舎の外に出て松林に集合した。そこで半時間ほど、大学生グループが「キャンプだホイ」などの歌と踊りを園児たちに伝授していた。その後、大学生グループはその場で幼稚園を後にした。

園児たちと先生そして筆者は再び園舎に戻る。歌と踊りでのがれたい園児たちが次々と美味しそうに麦茶を飲んでた。玄関には麦茶がたっぷりと入れられたタンクが置かれているのだ。園児たちは自由時間であれば、タンク横に置かれてあるコップに麦茶を注ぎ、好きなときにそれを飲んで良いということだ。

自らの教室に戻ると、教室の後ろにある手洗い所で手を洗う。筆者は年少組である「さくら」組にお邪魔した。ようやく、おやつの時間だ。園児たちは三つの机に分かれた。毎日分かれるグループだという。「アンパンマン・グループ」、「ピカチュウ・グループ」そして「紙飛行機グループ」の三つだが、筆者は「紙飛行機グループ」に入れてもらった。非常に珍しいことに、すなわちと席に付けた。「紙飛行機グループ」の机には筆者を入れて8人(この日一人休んでいたようだ)いた。まず、「ミルク当番」が取りに行ってきた紙パックの牛乳とストローが配られる。ちなみに、他にもウサギ小屋の水を換える「ウサギ当番」などがある。そして、今日のおやつが配られた。今日のおやつは、バナナ半分と沖縄の銘菓である「チンスコウ」だ。筆者は初めて見たのだが、紫色のチンスコウも配られた。

ちょうど11時に、先生は「紙飛行機グループ」でリーダー的な男児に向かって話された。

「今日はKくんをお願いしよう、いただきますのご挨拶。」

Kくんはその場で大きな声で言った。

「せいざ、手を合わせてください。さんはい、いただきます。」

中には、「いただきます」と言っている子もいたが、ほぼ全員が胸の前で手を合わせて「いただきます」を合唱した。Kくんをはじめとして、一言もしゃべらずに、一生懸命に牛乳を飲む。目の前に置かれてあるおやつは、牛乳を飲み終わった人しか食べてはいけないからだ。紫色のチンスコウからなくなってしまった。

食べ終わった園児はまず牛乳の紙パックやバナナの皮などをゴミ用のビニール袋の中に入れる。そして、前方の黒板に張ってある順番通りに降園の準備に取りかかるのだ。①椅子などの片付け、②歯磨き、③おたより帳の片付け、④園服着替え、⑤自分のところに座る、以上の順番だ。ゴミを捨てた園児たちは、手洗い所の横にある自分専用の歯ブラシを手にとって歯磨きをしていた。しかし、虫歯になっている子が目立つような気がしたので園児たちに尋ねてみると、やはり歯医者に通っている園児は少なくはなかった。制服を羽織り、ピンクの帽子を被り、黄色の鞆を背負った園児は4列になって座っていた。身仕度に時間のかかる女兒をお友達の女兒が手伝ったりしていた。

11時28分、先生が園児たちの前に座り、愛知教育大学の学生に習ったばかりの「キャンプだホイ」を全員で再び歌おうと提案した。全員でそれを歌った後、今日読む紙芝居を全員で決めた。

多数決の結果、今日の紙芝居は「雪女」となった。先生は多数決のときに園児たちと一緒に人数を数え、そのうえでどちらの方が多いのかなどと園児たちに一つひとつ問いながら進めていた。多数決で決定した「雪女」であったが、年少組の園児たちにはストーリーがやや難解なのか、別の一人遊びに熱中する子もちらほら見られた。

紙芝居が終わった後、全員で卒園式のときに読み上げる「送ることば」の練習を一度だけ行った。そして、降園直前に、先生から筆者は北海道の話をするように促された。筆者は、北海道の位置や、雪が降って積もる様子を話した。雪を直に一度も見たことのない園児にとっては、イメージしにくい不思議な話だったようだ。

正午きっかりに、教室では先生が降園の挨拶を行った。

「さよならしまーす。起立。はい、気をつけ。気をつけピン。はい、さんはい」

ここまで先生が述べると、後は全員で合唱だ。

「先生、さようなら。皆さん、さようなら。また明日、遊びましょうね、はい。」

最後の「はい」は一斉に片手を元気良く上げながら口に出す。そして、靴を履き変えて、園児たちは降園して行った。玄関には車で迎えに来ている保護者の姿があった。保護者たちは園児を迎えた後、一緒に自宅に戻り、昼食を家族一緒にとる。そして、家の用事を少し済ませてから、職場に戻るのだ。これが島の基本的なライフ・スタイルと言っても良いだろう。

園児たちが降園した後で、先生方に昨年完成したばかりの児童館に連れて行っていただいた。児童館とは、幼稚園とのかかわりにおいては、降園した後の島の園児たちを保育する施設だと言える。子どもたちが、幼稚園とは異なったグループ構成で遊んでいたことは興味深く思えた。

2-4-2) 北大東幼稚園

a) 島の様子

北大東島幼稚園がある北大東島は、沖縄島から東に380kmの所に位置している。島からは、南に約10km離れた南大東島しか見えない。南大東島以外には海が一面に広がっている。いくら天気の良い日であっても、同じ状況である。北大東島は、南大東島と同じく、島の周囲が断崖絶壁で囲まれた世界的に見ても非常に珍しい島である。島に走る舗装道路から見ると、周囲が高い壁で囲まれたようなすり鉢状の島である。面積は11.94km²で、今回訪れた島の中では粟国島に次いで小さい。この島に589人（男363人／女226人）の人たちが生活している（1999年2月現在）。島には国内でも珍しい村立の塾「なかよし塾」があり、子どもたちは放課後そこに通う。この例が示すように、島では教育に非常に力を入れている。

b) 島の幼稚園

1) 概観

北大東幼稚園は北大東島の中央部よりやや西寄りの所にある。住宅も、一部のサトウキビ農家以外はこの付近にかたまって建てられていた。特筆すべきは、沖縄県内の公立幼稚園が小学校の敷地内にある場合が多いにもかかわらず、北大東幼稚園は塀で囲まれた小学校・中学校の敷地の前に道路を挟んで（島で唯一の信号機を挟んで）、別の敷地に建てられていたことである。水色を基調とした低いフェンスで囲まれた敷地には、五方向に開かれたクリーム色の平屋建ての園舎が建てられている。

2) 沿革

1947年6月に木造平屋の園舎で創立した北大東村立北大東幼稚園は、1972年に「嘉手納将校婦人クラブ」より5千ドルの寄付を受けて、コンクリートの園舎に衣替えした。1991年には現在のような2年保育の形態になる。現在お一人で幼稚園を運営されている大城先生は1995年に赴任された。1997年にはALT（Assistant Language Teacher）が導入され、週に一度園児たちは英会話を学ぶこととなった。

3) クラス形態

非常に珍しいことに、北大東幼稚園では教師は地元出身の女性一人だが、クラスは年長組の「ぞう」組（男児6人／女児6人）と年少組の「りす」組（男児4人／女児3人）の2クラスある。だが、以下のように、教師は異なった課題を与えるなど2クラスを見事に運営している。ただし、4月の1ヵ月間のみは補充の教員がつく。というのも、北大東島は他の4つの島と異なっていて、島内には保育園がない。だから、島の子どもたちは集団保育に慣れていないということだ。この集団保育という形態に慣れるまでは一人で園児をみていくことは非常に難しいと先生は語った。

上記のように園児は総計19人だが（1999年2月現在）、20人を越えると教員が一人増員されるのだという。先生は「あと一人なのに」と悔しがっていた。

c) 幼稚園生活

08:00	登園～朝の活動～自由遊び
10:00	片付け～手洗い～おやつ～歯磨き
10:30	学級活動
11:00	当番活動
11:30	帰宅準備等
12:00	降園

*ただし、木曜日のみは幼稚園で弁当を食べるので降園は遅くなる。

*

*

農道は幼稚園への近道だ。ハブがいないので、農道を駆け抜けても噛まれる心配がない。農道を走り抜けると、島では唯一の就学前教育施設である幼稚園にたどり着く。園児たちは8時にはほぼ全員がすでに登園しており、各々の活動を行っている。ある園児たちは、ほうきで幼稚園の門近辺の履き掃除をしていた。一人ひとりが当り前のように掃除などの自分の分担を行っていた。

その仕事が終われば、後は自由だ。各々が好きなように、好きなことをしていた。教室の中で駒まわしをする園児もいれば、ホールでなわとびをする園児もいた。

園児たちは全員、制服を脱ぐことなく着たままだ。園児たちを見ていると、不思議なことに気付く。園児たちは全員、同じ制服を着ている訳ではなく、黄色と紺色の二種類に分かれているのだ。黄色の制服を着ている園児たちは「ぞう組」、つまり年長組であり、紺色の制服を着ている園児たちは「りす組」、つまり年少組であった。左胸につけられている名札と黄色の帽子、そして黄色のショルダーバックは全員お揃いであるが、制服によって遠目にも学年別がはっきりとわかる。

北大東幼稚園には教室が一つに、それに面して上から見ると五角形のかたちをしたホールがある。りす組のある園児から言わせれば、教室とは「おやつを食べるところ」でもあり「勉強する

ところ」でもある場所だという。トイレが教室の後ろの部分と直結していることは特筆すべきだろう。トイレと教室を仕切るドアはない。教室の後ろは縦に長い長方形にくり抜かれており、その中がトイレになっていた。

なわとび遊びやカードゲームなどの幾つもの遊びが交わるホールの壁には一際人目を引く大きな人の絵が張られてあった。園児たちに尋ねると、英語の時間に使うのだという。アメリカからやって来た先生がこの絵を使って、身体の部分で英語で言えるようにしていくようだ。

9時過ぎになった。雲一つない空の下で、サッカーをしたいと強硬に主張する男児が数人いたが、結局彼らのリクエスト通りに芝生に覆われた園庭でサッカーをやることになった。先生と筆者の二つのチームに分かれて試合を行った。まるでゴール・ポストのような間隔で2本の木が植えられていた。面白いことに、園児たちはほぼ同じ人数に自然と分かれた。後に先生のお話をうかがっていて気付いたのだが、筆者などはどうでもよく、日頃の人間関係が非常に反映したチームの分かれ方ようだった。筆者はずっとゴールキーパーとして動いてはならないと園児たちに指示されていたので、結局炎天下のなか突っ立ったままだった。クラスの中のいわゆるガキ大將的な存在の男児の働きによって、筆者のチームは11対3で大勝した。

半時間ほどの試合だったが、2月とはいえ札幌の真夏並みの日差しのなかでは、全員が汗をかいてしまった。大半の園児たちは、制服を園庭の木にぶらさげたまま、園舎に戻った。教室に戻ると、先生が画用紙を折って、扇子を作っていた。周囲の園児たちも先生に習いながら、各々で個性的な扇子を作っていた。しかし、全員が一斉に作っている訳ではなかった。扇子を作りたい園児は扇子を作り、園庭に残ってブランコで遊んでいる園児もいた。園庭の隅にあるウサギ小屋にいるウサギの「しまじろう」に声をかけている園児もいる。筆者はぞう組の女兒たちと話し込んでいた。一人の女兒が父親と一緒に「あんまく」を取りに行ったという話が発端だった。筆者には「あんまく」が何なのか、皆目見当さえつかなかった⁽⁸⁾。食べるものらしい。植物ではなく、蟹のようなものらしい。その卵が美味しいという。ぞう組の女兒数人に説明してもらったが、まったくわからなかった。

10時になる直前に先生から片付けの指示が出された。どうやら、おやつの時間らしい。各々で作った扇子を筆者に預けた園児たちも、園庭で遊んでいた園児たちも、教室脇にある手洗い所で手をよく洗った。そして、今日の「ミルク当番」は牛乳を取りに、道路を挟んだ小中学校に向かって行った。幼稚園と小中学校を結ぶ横断歩道では、しっかりと手を上げていた。

今日は天気が良いので、外でおやつを食べることになった。園庭の木陰に輪になって先生も園児たちも座った。10時17分、筆者もその輪のなかに混ぜてもらった。両隣は、先ほどサッカーで得点王になった男児と、「あんまく」の話をしていた年長の女兒となった。まず、紙パックの牛乳とストローが配られる。

そして、今日のお当番さんのMさんが立ち上がって、挨拶だ。ちなみに、この幼稚園では名前(名字ではない)を呼び捨てにしないで、女兒同士は「さん」を必ずつけて呼び合っていた。

「せいざ。」

他の園児たちは一斉に声を合わせて「はい」と言って、三角座りを正して、背筋を伸ばした。

Mさんは続ける。「これから、おやつをいただきます。みんな揃っていただきます。」

「いただきます」の部分は見事に全員で唱和した。

その後、先生が続ける。

「どうぞ、召し上がれー。」

全員が牛乳を飲んでいる最中、先生が豆餅のようなお菓子を一人ひとりに配った。先生によると、牛乳が嫌いな子もいるので牛乳のみでは困るから、お菓子代を別途に徴収して毎日配っているのだそうだ。パンなどの付け合わせが牛乳と同じように学校からもらうことができれば良いのにと話しておられた。

食べ終わった園児はゴミをビニール袋に入れてから、歯磨きに向かった。教室の後ろにある手洗い所で自分専用の歯ブラシで磨いていた。

おやつ後は、ゲームをすることになった。昨日はお誕生日会だったのだが、園児たちが計画していたゲームが時間の都合でできなかったそうだ。ちなみに一昨日は、年長組が小学校への体験入学をした日だった。連日のイベント続きで園児たちはやや疲れ気味だったかもしれない。

10時43分から昨日行われるはずだったゲームを全員でホールで行おうとした。しかし、3人の男児が亀のまね（恐らく幼稚園で飼っているミドリガメの「みどり」のまね）をして言うことを聞かない。先生が黙って3人を見ていたら、他の園児たちが彼らに対して注意し始めた。それを発端にして、りす組の女兒を一人の男児が突き飛ばした。すると先生は、その行為に対しては厳しく注意した。

ゲーム開始。先生が音楽をストップさせると同時に、園児たちも動きをストップさせるというゲームだ。勝ち残っている園児は一人を除き、ぞう組の園児ばかりだ。最後まで残った園児にはヒーローのミニチュア人形が賞品として配られた。第二回戦が始まった。動いてしまった園児たちは残った園児の応援をしたり、動いていないかチェックしたりしている。他のことをしている園児は一人もおらず、全員が最後まで参加していた。

11時になると、今度は園児たちを大きな輪にして座らせた。先生はその輪の外をぐるぐると話をしながら歩き続けていたのだが、突然手にしていた先ほど作ったばかりの扇子で、先のサッカー得点王の男児を軽くたたいた。すると先生は急に走り出したのだが、得点王は立ち上がると一気に追いかけて先生を捕まえてしまった。先生は本当に悔しがっていた。突然のことで驚いたが、「ハンカチ落とし」の北大東幼稚園バージョンが始まっていたのだ。先生は次の園児をまた扇子でたたいて逃げて、その園児が元いた場所に無事に座ることができた。先生は時折、同じ園児に重ねて当たらないように注意した。中には何度も捕まってしまって一向に座れない園児もいたが、そのようなときには先生がすかさずそっとアドバイスをしていた。それから、先生は「みんながんばったから」と昨日のお誕生日会で余ったと思われるバッジを全員に配った。

11時13分、先生のとこに園児たちが集まって何かを訴えている。園児たちは「猫と鼠」というゲームをしたいのだという。リクエスト通りに降園の準備の前に、鬼ごっこのようなそのゲームを行った。

そして、降園の準備だ。園児たちは教室に入り、身支度を整える。一方で、椅子を机の上にひっくり返して上げておいた。準備が整った園児からホールに集合し、一人ひとりに連絡帳が配られた。

園児たちはホール内の一段高くなっているステージ上に腰をかけて、先生の読む紙芝居に見入っていた。今日の紙芝居は「ポテトサラダの大好きな王様」だ。そこから先生は、好き嫌いせずに食べるようにという教訓を導き出して、園児たちに伝えた。

11時35分、玄関が騒がしい。小学生たちが集まっている。どうやら以前、島の小学校で教鞭を取っていた教師が久しぶりに訪れたらしい。そこで結局、今日はいつもより早く終わることになった。

音楽に合わせた歌と踊りの後、お当番さんが前に出てきて「気をつけ。」と言うと、他の園児たちは「はい」と元気に答えた。

先生は皆の前で言う。

「はい、今日26日金曜日終わりました。」と言いながら、カレンダーの26という数字に×をつけて、こう続けた。

「明日は第4土曜日でお休みです。明後日は日曜日でお休みです。お休みは？」

「2回。」と、園児たちは元気に答えた。

「はい、2回お休みして、この次幼稚園に来るときは？」

「3月。」園児たちは即座に答える。

「そうです。2月はもうないよー。2月の次は？」

「3月。」

お当番さんがことばを引き継いだ。

「月曜日のお当番さんはSさんです。よろしくお願いします。気をつけ。」

その他の園児たちの元気の良い返事の後、お当番さんが続けた。

「今日はこれで終わります。」

このことばを受けて、全員が声を揃えて言った。

「先生、皆さん、さようなら。」

園児たちはそのままじっとしている。先生が皆を見渡した後、「はい」と声をかけると、園児たちは元気に園舎の外に飛び出して行った。そして、親たちが車で迎えに来るまで、小学生たちと遊んで待っていた。ほぼ全員の園児が、一緒に自宅で昼食を取るために、保護者が迎えに来るという。

2-5) 慶良間諸島の幼稚園

2-5-1) 渡嘉敷幼稚園

a) 島の様子

渡嘉敷幼稚園のある渡嘉敷島は、那覇の西海上およそ30kmのところにある南北に伸びた島である。慶良間諸島の東端にあり、海の透明度が世界屈指とも言われている。夏は特に国内屈指のダイビング・スポットとして非常に知られており、冬から春にかけてはホェール・ウォッチングの絶好の場としても有名である。そのような現在の自然の楽園的なイメージとは裏腹に、第2次世界大戦末期には米軍上陸後に島のおよそ半数の368人の住民が集団自決したという悲しい歴史ももっている。

島の面積は15.29km²だが、島は山が多いために住宅が密集しているのは渡嘉敷港付近と阿波連ビーチ付近の2ヵ所である。どちらにせよ歩いてすぐに海に出られるという海とは切っても切れない関係にある。島には735人（男366人／女369人）が生活している（1999年2月現在）。

b) 島の幼稚園

1) 概観

渡嘉敷幼稚園は渡嘉敷港から歩いてすぐの所にある。つまり、那覇と渡嘉敷島を往復する船々が入り出る島の東側にある島最大の港からすぐの所にある。渡嘉敷小中学校の門をくぐると、

右端に渡嘉敷幼稚園がある。この幼稚園も小中学校の敷地内にある。

渡嘉敷島がホェール・ウォッチングで知られることを象徴するかのように、渡嘉敷幼稚園の門の上にはシーサーならぬクジラが2匹向かい合って飾られてあった。園舎は平屋建ての建物であり、中に入ると奥深い長方形のワンフロアになっていた。珍しいことに、園庭はすべて砂で覆われており、独立した砂場というスペースがない。言わば園庭すべてが大きな砂場になっているわけだ。園児一人ひとりの靴箱にゴム草履が置いてあるのもその所為である。

2) 沿革

1974年4月に渡嘉敷幼稚園は開園した⁽⁹⁾。このときに教諭として就任したのが、現在教頭の新垣先生である。記念誌や幼稚園の文集を見ればわかるが、渡嘉敷幼稚園の歩みは一方で新垣先生の歩みとも言っても過言ではないほどである。旧小中学校校舎、村民集会所と園舎は移っていたが、1981年に現在の新しい園舎に移った。1977年からは現在のような2年保育となった。1981年には週に一回の学校給食が始まった。1986年からは教員補充もかない、二人体制になった。1990年くらいから6月23日には必ず「白玉の塔」へ行くようになり、現在のようにそこで高齢者の方々から戦争時の話をうかがい、それを絵で表現するようになった。それらは先生によってまとめられて、世界で一冊の絵本となっている。年少児は最初に聞く戦争の話だけにインパクトが相当強いようで、かなり力のこもった絵であるように筆者には見えた。

3) クラス形態

渡嘉敷幼稚園は2年保育であるが、教室は大きな教室一つのみであり、各々の学年別による保育・教育は行っていない。園児たちに尋ねても誰が年長で誰が年少なのか正確に答えることのできる園児はあまりいないほど、学年の境界線はそれほど厳格なものではなかった。いわゆる4歳児は9人（男児5人／女児4人）で、5歳児は10人（男児8人／女児2人）だった（1999年2月現在）。この園児たちを教育しているのが、2人の女性教師である。1988年に赴任された我喜屋先生は渡嘉敷島出身ではないが、母親がこの島の出身であり、現在は島の男性と結婚されている。もう一人は、渡嘉敷島出身である教頭の新垣先生である。先生は出産休暇以外は現在の幼稚園が開園して以来ずっと現場の第一線におられた。今なお卒園生全員一人ひとりに卒業式と成人の日に祝電を出し続けておられる。子どもたちにとってご自身は「島の母」であり、ずっと見守る義務があると語っておられた。

c) 幼稚園生活

08:10 登園～朝の活動～自由遊び

10:30 おやつ～時間～歯磨き～自由遊び

12:00 降園

*ただし、火曜日のみ小学校と同じ給食があり、降園は14時となる。

*

*

登園時間は8時10分からとなっているが、それ以前に来ている園児も少なくない。小学校は8時までに登校しなければならないから、兄弟がいる園児たちは一緒に登園してくるのだ。

登園した園児はまず花や自分が育てている苺の鉢に水をやる。筆者が訪ねた日には、すでに赤くなった実を食べていた園児もいた。そして園舎の中に入ると、上靴に履き換えて、黄色の帽子

と同色のリュックそして水色か黄色の手提げの絵本入れを棚にしまい、リュックの中からは連絡帳を出して先生に提出する。絵本を借りていた園児は絵本を返却する。同様に、絵本の貸し出しも大体朝のこの時間帯に行われることになっていた。園児たちが「これ面白かったよ」と互いに情報交換ができるようにという配慮からだ。借りることができるのは一日一人2冊までだ。1冊借りるごとに、教室の壁に張られてあるグラフにシールを一つずつ張ることができるようになっていた。

8時40分、教頭先生が広い教室の真ん中に机を用意して、その上をきれいに拭くと、頭に三角頭巾をしてスモックを身に付けた男児3人がじゃがいもの皮を剥き始めた。横ではボールを蹴っている男児もいた。園庭に出ている園児は一人もいない。今日はとても寒いからだろうか。「今日は寒いね」と一人の男児に話しかけると、「冬だもん」と一蹴されてしまった。どんよりとした曇り空のせいだろうか、時間がゆっくりと過ぎていくような気がした。背後では「鬼のパンツ」などの音楽が流れていた。

8時50分頃になると、じゃがいものを剥いていた男児たちは、今度は危うげな手つきで包丁を使って玉葱を切っていた。筆者が訪れた1999年2月22日は、日常の渡嘉敷幼稚園とはやや異なっていた。島内の保育所の子どもたちが遊びにやって来るのだ。園児たちが順番に調理している野菜は、幼稚園の農園で作られたものだという。その野菜を素材にカレーライスをつくって一緒に食べる「カレー・パーティー」の日なのだ。日本国は未曾有の少子化時代にあると言われている。そのような現代においては数少ない幼児をめぐる、幼稚園と保育所は敵対関係にあるとも言われている。要するに、少ない子どもの取り合いというわけだ。このような中、筆者自身の北海道及び本州におけるフィールドワークでも感じたことであるが、幼稚園の保育所化の傾向が見られる。だが、渡嘉敷島では幼稚園と保育所の関係は良好である。どちらも公立であり、しかも島に唯一の機関だからかもしれないが、このように互いの往来が行われている。これは渡嘉敷島のみならず、保育所のない北大東島以外の3つの島々にも言えることであった。さらに、渡嘉敷幼稚園は月に一度のペースで島の老人センターを訪問し、高齢者との交流も行っている。

9時を過ぎると、最初に調理をしていた男児たちが役目を終えたようだ。彼らは急いでスモックを脱ぎ、園庭に飛び出して行った。調理を終えたら自由に遊んで良いようだった。寒さなどはまるで関係なかったようだ。

筆者は一人の年少の女兒とおまごををしていた。広い教室の隅にある、まるで隠れ家のようなスペースで、筆者は毛糸のチャンプルーなどの料理でもてなしを受けていた。このスペースは絵本が置かれてあり、一人で絵本を集中して読めるような畳敷きのスペースだった。

9時33分、保育所の子どもたちが先生に連れられてやって来た。保育所の子どもたちは園舎の中に入らずに、アンパンマンの滑り台などがたくさんある園庭で遊び始めた。園児たちもほとんど、園庭に出ている。園児たちは園庭の外の小学校の敷地で遊んでいる場合が多いようだ。年長の男児たちが竹馬をやり始めた。竹馬のまま、敷地内の築山を駆け上がっていく園児もいた。

9時55分、小学校で飼っている子山羊2頭が姿を現した。スーツ姿の男性が引き連れている。それぞれ「とかちゃん」、「トラッシュ」という名前だと、背中まで伸びた髪をきれいに編みこんだ男児が教えてくれた。彼は竹馬をやめて、次は一輪車をもってきた。だが、それを乗りこなすにはまだまだ練習が必要なようだった。

10時20分、寒さに耐えられず、筆者はコートを取りに一旦園舎の中へ戻った。すると、2月の初旬に北海道より送られてから冷凍庫の中に保管されていた雪だるまが突然登場した。園児たち

は到着した当日にたっぷりと楽しんだようで、この日はそれほどの盛り上がりは見せなかった。雪だるまを抱えては丘の上から転がしたり、水をかけたりして遊んでいた。幾つにも割れて小さくなったうえに、すっかり泥だらけになってしまった雪だるまがシーソーの上で飛び跳ねていた。

10時53分、カレーができたらしい。先生たちから「お片付け」の声がかかった。園児たちは園舎に入り、準備にとりかかった。

この日は保育所の子どもたちと一緒に「カレー・パーティー」という特別な日だったので厳密にはなされなかったが、普段は以下のような挨拶がなされるようだ。

一週間毎に交代するお当番さんが前に出て言う。

「せいざ、礼。」

すると、他の園児たちは膝の上に両手を置いてから、今度はお当番さんに向かって一斉に言う。

「お当番さん、ご苦労さん。」

すると、お当番さんは「どうぞ、おあがりください。」と言い、続いて全員が声を揃えて「いただきます。」と言って、牛乳を飲み始めるのだという。渡嘉敷幼稚園では可能な限り、やり取りは歌に頼らないようにしているのだという。明瞭なことばのやり取りを中心に行っているということだ。

たまに牛乳の他に、父母からの差し入れのお菓子があるときもあるらしい。いずれにせよ、おやつ後は歯磨きだ。教室の後ろとつながっているトイレのスペースの手前部分には手洗い所があり、そこで園児たちは歯磨きをする。渡嘉敷幼稚園では特に歯磨きには力を入れているという。島に歯医者がないからだ。

筆者も園児たちが調理したじゃがいもと玉葱がたっぷりに入った美味しいカレーライスをご馳走になった。

結局飛行機の搭乗時刻が迫っていることもあり、渡嘉敷幼稚園には最後までいることができず、食べ終わると慌ただしく幼稚園を後にした。だから、降園の様子を記録することはできなかった。最後に、先生からお聞きした毎日の降園の様子を記述しておきたい。

まず帰宅方向別に3つのグループに分かれる。

各々のグループ毎にその日の人数を確認する。園児たち同士が自らの人数を把握できるようにという教育的な意味と、バスで通園するグループは運転手の方に人数を報告しなければならないことからくる実務的な意味合いもある。

先生がお話をした後、園児たちは3列に並ぶ。先生が一人ひとりに連絡帳を返し、手渡された園児から園舎の外に出て行く。一斉に声を合わせてのお帰りの挨拶などはないらしい。

2-5-2) 栗国幼稚園

a) 島の様子

栗国幼稚園のある栗国島は、那覇の北西約60kmにあり、慶良間諸島の北に位置する島である。島の面積は7.62km²と今回訪れた島の中でもっとも小さい。しかし、島の中央部にいる限りでは、島にいるといった感覚を味わうことははまっとなかった。車で沿岸部に出て行かない限りは島の中で、少なくとも筆者は海を感じることはなかった。島には1004人（男509人／女495人）の人たちが生活している（1999年2月現在）。

b) 島の幼稚園

1) 概観

栗国幼稚園は、弧が上にある歪んだ半円形をした栗国島の中心部よりやや南の辺りにある。村役場等の施設や住宅もこの周辺に集まっている。栗国幼稚園も他の多くの幼稚園と同じように栗国小中学校と同じ敷地内に建てられていた。小学校内の給食室に園児たちが毎日飲むミルクを取りに行ったり、逆に小学生たちが遊びに来たりと行き来は自由である。ソテツに囲まれた園庭の奥には、平屋建ての園舎がある。園舎には二つの出入り口があり、園児たちはどちらからも出入りは自由になっていた。その中の一つの正面玄関から園舎に入ると、広いホールが一面に広がっており、ドアで仕切られているのは奥にある職員室のみであった。

2) 沿革

栗国幼稚園は1973年4月に開園した。翌1974年4月に現在の園舎が完成した。現在の主任である新城先生が1977年4月に就任した。1989年5月には週に一度ではあるが、小学校と同じ給食が園児たちに出されるようになった。ただし、現在は週に2日（火曜と木曜）、給食が出されている。現在のような2年保育になったのは、つい最近の1994年4月のことである。

3) クラス形態

栗国幼稚園には、いわゆる4歳児が5人（男児4人／女児1人）、5歳児が11人（男児4人／女児7人）の計16人の園児が在籍していた（1999年2月現在）。上述の通り1994年に2年保育になったばかりだが、園児たちは学年別には分かれずに一緒に教育を受けていた。つまり、クラスは一つのみであり、これらの園児たちを主任の新城先生と、昨年10月に赴任されてきたばかりの臨時教師の松本先生が二人で受け持っていた。

c) 幼稚園生活

〈月・水・金のスケジュール〉

- 08:00 登園～朝の活動～自由遊び
- 10:00 片付け
- 10:30 おやつ～歯磨き
- 11:00 課題
- 11:30 片付け～掃除
- 12:00 降園

〈火・木のスケジュール〉

- 08:00 登園～朝の活動（絵本貸し出し～水かけ）～自由遊び
- 10:30 片付け～掃除
- 11:00 絵本 or 紙芝居、話し合い
- 11:30 給食（小学校と同じ）準備
- 12:00 食べ始める～歯磨き
- 13:00 片付け
- 13:30 降園

*

*

昨日とはうって変わって雲一つない青空のもと、栗国幼稚園に行くと、「ひろしニーニー」と大歓迎された。前日にご挨拶をするために幼稚園を訪れた際、学校内を案内してくれた（さらには体育館の床下など学校探検も一緒に行った）男児 K 君が昨日と同じ様に「ひろしニーニー」と飛んできてくれたからだ。K 君につられて他の園児たちもそのように呼び始め、筆者の呼称は「ひろしニーニー」となった。K 君は幼稚園ではもっとも知識が豊富にあるとともに理路整然と話すことができるので、男児の中では一目置かれた存在である。その彼が受け容れた筆者は、園児たちの中では少なくとも拒絶されるべき対象とはならなかったようだ。このエピソードが示すように、フィールドワークにおいては一番最初に誰と知り合うかによって、その後のフィールドワークが左右されることがしばしばある。このような出会いに関してはいかなる理論武装も役には立たない。フィールドワーカー自身において制御不能な部分があり、偶然に大きく支配されているとも言えるからだ。筆者の場合、栗国島に関しては K 君と最初に知り合いになったことは驚くべきほどの幸運だった。

8時半には大半の園児たちがすでに登園しており、各々で好きなことをしている。気持ち良い青空のもとに全員が出ており、教室にいたる園児は一人もいなかった。芝生に覆われた園庭では園児たちが、用意された跳び箱を次々に飛んでいる。K 君は自分の雄姿をビデオカメラで撮ってくれと大きな声で叫んでいる。筆者も園児たちから飛ぶように促されたが、固辞した。すると、「大学生だから重すぎるんだわ」と、ある園児は納得していた。

跳び箱の次は、なわとびをする姿を撮るように K 君は言う。そのすぐそばではホッピングをする園児がいる。他に「チビタッカー」と呼ばれていた二輪車で遊ぶ園児もいた。

K 君以外の園児たちはすべて、同じ服装をしていた。「体育着」と呼ばれる白の体操服にエンジ色の半パンのジャージというスタイルだ。給食のある火曜日と木曜日は、この日のようなスタイルで登園することになっているのだという。給食のないそれ以外の日は、制服を着て登園するのだという。筆者が訪ねた1999年2月23日は火曜日なので、体育着での登園だったのだ。

8時50分、K 君の先導で幼稚園の園舎と隣に建てられている小中学校の体育館の周囲を探検した。途中 K 君の家の紹介があったり、数人で飼っているという犬を紹介されたり、深い草むらを越えたりと様々なオプション・ツアーがついていたが、何とか元の位置に戻ってきた。探検の途中、給食を食べるときに誰が筆者の隣に座るかでもめた。

園庭に戻ると、筆者に対して飛行機で栗国島に来たのか、札幌から直接来たのかなどという交通ルートに関する質問が出された。筆者と話していた年長の園児たちの大半は栗国と那覇を結ぶ「琉球エアー・コミューター」という名称を正確に言えることができた。園児たちは、栗国と那覇との往復に搭乗しているので覚えてしまっているのだ。よくよく話を聞いてみると、週末には沖縄島に行く園児は少なくともはなかった。あまり知られていないことのようにだが、離島の住民の中には沖縄島にセカンド・ハウス（どちらがセカンドなのかは疑問だが）を持っている場合があった。それは一握りの高所得者だけの特殊なケースではなく、筆者がお会いした方々の大半が沖縄島内に家を建てているか、購入しているか、あるいは借りたままにしていた。その理由の主要な一つは、島内には高校がないことが深く関連している。

園児たちは園庭のベンチから離れて、すぐ横の大きな木に登り始めた。3 m近くもある木の上方にある窪みは園児たちにとっての秘密基地のようだった。そこには6人も上れるのだという。その背の高い木の下方の枝にはハンモックが吊されてあり、一人の男児がブランコ代わりに揺ら

していた。

揺れているのはハンモックだけではない。幼稚園の隣にある体育館の柱に一方の端を結び付けて、主任の先生が長いなわとび用のなわで「大波、小波」をしていた。順番に飛ぶ園児たちの大半は女児だった。先の K 君は45回も飛べたと嬉しそうに報告にやって来た。もう一人の先生は女児たちのホッピングの手助けをしている。

K 君がやって来て、先の夏休みにカナダに旅行した話をしてくれた。彼は親の転勤で4月から島を出るのだが、島の中だけにとどまらぬ相対的な視点をもっている稀有な園児のように筆者には思えた。換言すれば、筆者にとってはまさにきわめて優秀な翻訳者的な存在だった。彼の両親はともに教師だ。前夜、島で唯一と言われる料理店で、彼の両親が中学校の生徒たちに食事をおごっていたところにたまたま筆者も居合わせた。他の離島においても、先生方が放課後に教え子の中学生と共に外食するといった場面をしばしば見かけた。生徒数が少ないことと、島の住民の誰もが顔馴染みであるからこそ可能なのだろう。都市部では一部の生徒への「ひいき」として問題視されてしまう行為として映ってしまうために、そのような行為に対して教師は躊躇してしまうことだろう。島の中では、小中学校の教師をはじめとした公務員の方々が幾つかの役割を担っている場合がしばしば見られた。彼／かの女たちは数年で出ていく存在ではあるが、確実に島の外との結节点的な役割を担っているのである。だからこそ、島の内なる論理と外からの論理の双方からの主張を調整せざるを得ない役割をも背負うことになってしまうのであろう。

園児たちが声を合わせて面白い歌を歌ってくれた。

「保育園生（ママ）は本読んで、幼稚園生（ママ）はよーいこ、1年生は石投げて、2年生は逃げて、3年生は酒飲んで、4年生は酔っ払い、5年生はゴリラ、6年生はろくろ首、中学生はチューをして、高校生は恋をして、大学生は大失敗、大人になったらおととと、おじいさんになったらつるっばげ。」

以上のような歌だ。これを園児たちは誦じて歌える。先生方は快く思っていない様子ではあったが。

次に K 君は「チャレンジ・カード」を持ってきてくれた。なわとび10回、ホッピング10回などの課題がこなせれば、その部分にシールが貼ってもらえる先生手作りのカードだ。園児たちはこのカードの目標をすべて制覇するために、朝の時間にそれぞれの課題に取り組んでいたのだ。だが、園児たちにとっては、「課題」というような重圧のあるものとしては認識されてはいないようだった。

10時を過ぎた頃、数人の園児と共に園舎の中に入った。とても広く日当りの良い教室の隅には、畳敷きのままごと用のスペースがあったり、三方を絵本がぎっしりと詰まった本棚に囲まれた絵本のスペースがあった。次はこの絵本のスペースで恐竜の図鑑を読んだり、お絵描きをしたりすることになった。

11時近くなると、「片付け」の声かけられた。音楽が流れる中、各々が片付けを終えると、園児たちは4列に並んで座った。音楽を止めてから、先生に合わせて座ったままの姿勢で歌いながら踊った。その歌は、園児たちが自分たちで次々と歌のストーリーそして振り付けも変えられるものだった。裸足の園児が数人いたが、主任の先生は上靴を持ってきて、履くように促していた。

その歌の後は、全員の意見によって紙芝居を観ることに決まった。「かちかち山」の紙芝居が始まった。先程まで勝手に立ち歩いていた二人の男児も熱心にじっとしたまま聞いていた。

11時25分に、園児たちの後ろから教室の様子をビデオカメラで撮影していた筆者が紹介された。園児たちの前に出て、北海道のことを話すことになった。尋ねてみると、北海道に行ったことがある園児は3人いた。北海道の場所を尋ねると、「大通公園があるところ」という実際に訪れた体験を持った園児からの答えから、「那覇と北海道はどちらが遠いの?」「宮古よりも遠い?」という質問も飛び出した。

今度は、降園後にどのようなことをして過ごしているのか尋ねてみた。大半の園児たちは、「ポケモンごっこ」や「忍者ごっこ」などのごっこ遊びを近所の子どもたち同士でしているらしい。だが、近所とはいえ、男女は一緒に遊ぶことはないのだという。筆者が不思議に思い問い返すと、「だって、女軍団だもん、こいつら」という答えが男児から返ってきた。実際に年長のグループは女兒の比率が非常に高いので、幼稚園でも女兒の勢力が優勢なのだという。筆者が前日に島の中をふらふらしていると、確かに園児たちは男児同士で遊んでいた。興味深いことに、幼稚園内では天敵同士とも呼んで良いような関係の二人が一緒に仲良く遊んでいる光景を目にした。先生方に尋ねてみると、園児たち同士も降園後は遊び友達が限られてくるので、少々馬が合わなくても我慢して遊ぶということだ。逆に、遊び相手の選択肢が広がる幼稚園では自らの好きな相手と遊ぶことが許される場だと言えるのかもしれない。

筆者による北海道と粟国についての質問は「給食食べたーい」という園児たちの切なる欲求の声に11時48分に打ち切りとなった。

今日は給食の日なので、給食の準備に取りかかった。今日の給食当番は「ヒトカゲ・グループ」だ。他のグループ名にも「ミュー」や「サンダース」といういわゆる「ポケモン」の中のキャラクターの名称が用いられていた。当番の園児3人は同じ敷地内にある小学校まで給食を取りに行った。他の園児は机を出したり、椅子を出したりしている。先生が「今日はレストランみたいに好きに座る?」と尋ねると、園児たちは一斉に「レストランが良い」と答えて、自分が好きな席に座って食べる方式となった。本物のレストランのように、机の上にはチェック柄の大きなテーブルクロスが広げられた。ここまでは平穏だったが、いざ座る段階になって問題が起こった。筆者の隣に誰が座るかでもめ始めたのだ。以前北海道のある幼稚園に一年間通園させていただいたときも(宮内:1998 a & 1998 b), 昼食時の座席問題は筆者の頭を悩ませる大問題だった。今回はK君の提案でじゃんけんで決めることになった。言い出しっぺのK君は見事に一番最初に勝って筆者の隣に座った。そして、次にじゃんけんで負けた男児が泣き出した。ちょうどそのとき、教室の壁掛け時計が正午を知らせるとほぼ同時に、隣の机のテーブルクロスが床に落ちた。ある男児が故意に落としてしまったのだ。そちらのテーブルに座っていた女兒たちは自分の椅子をもってこちらのテーブルに移ってきたので、今度はこちらのテーブルが大混乱となった。結局先生が戻って来られ、その男児を注意し、女兒たちは元の位置に戻って行った。

12時08分、プラスチック製の箸と紙パックの牛乳が一人ひとりのお盆の上に配られた。先生たちが器に今日の料理を注いでいった。今日の献立は、きゅうりの胡麻和え、さつまいもの天ぷら、そしてうどんだ。筆者には山盛りの大サービスをしていただいた。

お当番さん3人が前に出てきた。

男女混合の3人はゆっくりとした口調で言う。

「手を膝。準備はいいですか。」

「いいです。」と他の園児は答えた。すると、お当番さんは続けて言った。

「では、給食をいただきます。」

「いただきます。」と他の園児たちは声を合わせて言った。これに続き、お当番さんは言う。

「どうぞ、召し上がれ。」

「いただきます。」と再び大きな声で言う園児もいれば、すでに天ぶらをほおばっている園児もいた。栗国幼稚園ではストローが配られないので、園児の中には牛乳を一気に飲み干す園児もいた。

12時37分になると、お当番さんが前に出てきた。今度はなぜか女兒一人のみだ。

「手をお膝。ごちそうさまの挨拶をしましょう。」

続いて全員で「ごちそうさまでした。」と言って、給食の片付けに入った。牛乳パックは決まった折り方があり、それに従って小さく畳まなければならない。どうしても嫌いなものが食べられなくて、まだ食べ終わらない園児もいたが、他の園児たちは教室後ろの手洗い所で歯磨きをしていた。食器を戻したり、机をしまったりと一通りの片付けを終えると、園児たちは棚から取り出した自分のランドセル状の黄色の鞆を背負い、赤白帽をかぶると、4列に並んで座っていた。そして、お当番さんが連絡帳を一人ひとりに返した。

一通りいつものルーティーン・ワークが終わると13時を過ぎていた。主任の先生が前に出て、一人ひとりに「今日はどんなことして遊んだ?」、「明日はどんなことして遊ぶ?」と尋ねた。その後、今日は「大事なお話し合い」があるので留守番をしておくようにと話した。筆者が訪ねた1999年2月23日は、小中学校の授業参観と「ガクタイ」という通称で呼ばれることの多い「学力向上対策実践発表会」当日だったのだ。この後、中学校の視聴覚教室では「平成10年度栗国村学力向上対策実践発表会」が島の人たちを迎えて開催された。筆者も幼稚園の部だけは参加し先生方の実践報告の発表を拝聴させていただいたが、その後のプログラムは残念なことに飛行機塔乗時刻が迫っていたので聞くことができなかった。先生方にとっても、この日はいつもとは異なる特別な日だったのだ。会場にはK君の両親も運営側として忙しくされていた。

13時10分に、最後に「思い出」の音楽が流され、園児たちは合唱した。そして、二人の先生の前にそれぞれ並んで、一人ずつ先生とお話をした園児から降園だった。この日のようなパターンとは別に、「先生さようなら、皆さんさようなら。」と全員で挨拶してから降園したり、全員でジャンケンをした後で降園だったりというパターンもあり、降園の仕方にはいくつかのパリエーションがあるのだと聞いた。

3) 島に共通する問題

以上のとおり、5つの島のそれぞれの幼稚園の日常生活をエスノグラフィー的にスケッチしてきた。改めて言うまでもないが、これはあくまでも筆者の個人的な視点から描写したものであり、参加者そして書き手が変われば、本稿とは異なった描写がなされる可能性を有している。例えば、それぞれの島で生まれ生活している人たちの視点から、幼稚園に関する別種のエスノグラフィーが生み出されるかもしれないのだ。

このように偏った本稿ではあるが、各々の島による違いはぼんやりとではあるがにじみ出てきたのではないだろうか。だが、それを各々の島の「文化」であると呈示するには、まだまだ根拠に乏しく、資料も満足ではない。一方で、各々の島を越えて共通する部分も浮かび上がってきた。ここでは、少なくとも5つの島の幼稚園に共通する点を指摘していきたい。

「ヤマト」の園児と島の園児たち

まず最初に、各々のエスノグラフィ的なスケッチからも看取されることと思うが、沖縄において「ヤマト」と称される地域で生活する者の大半が持っているように思われる沖縄の子どもたちに対するイメージは見事に粉碎される。子どもたちは「ウチナーグチ」と呼ばれる、本州では聞きとることが難しいと言われている方言で話すことはほとんどなかった。確かに園児たちは、年上の男性のことを「ニーニー」、年上の女性のことを「ネーネー」と呼ぶ場合が多かった。だが、筆者が意味がわからずに聞き返したことは、今回の幼稚園のフィールドワークにおいては一例を除きほとんどなかった。「ヤマト」とは異なったことばで話されるなどといった「沖縄の離島」独自の、「ヤマト」の目から見て明らかに“わかりやすい情景”を、少なくとも幼稚園内において筆者は目にすることはなかった⁽¹⁰⁾。筆者が今までに訪ねた北海道や本州の幼稚園と同じように、園児たちは「ピカチュウ」が大好きで、昨夜観たアニメ番組が話題にのぼっていた。

固定されるメンバー

次に共通して見られた点は、沖縄県だけに限定されぬ島固有の問題として提起できるかもしれない。本稿で言及した5島においては、多良間幼稚園の34人を最大に、南大東幼稚園が22人、北大東幼稚園と渡嘉敷幼稚園が共に19人、粟国幼稚園が16人とそれぞれの幼稚園に在籍していた総園児数は少ない。上記のとおり、沖縄県においては幼稚園はほぼ義務教育機関として認知されていると考えられるので、幼稚園には島の子どもたちのほぼ全員が通園している。その後、島で生活する子どもたちはずっと同じクラスメイトと共に学校空間を過ごすことになる。島にはクラス替えが存在しないのだ。しかも、先輩後輩にもほとんど異動はない。

少なくとも5つの島には高校がないので、高校に進学する者は島を離れなければならない。逆に言えば、その時点まではずっと学校空間では幼稚園（さらに保育所の場合も）から同じ顔触れで過ごしていたことになる。話をうかがった限り、島の子どもたちは仲が良い。だが、学年によってはそうではない場合もたまに見られるとも聞いた。ある島では不登校の生徒がいるという話も聞いた。一つの島社会の中の不登校。自らの体験をなぞれば、子どもたちは非常に無邪気な残忍さも持ち合わせた存在であり、青年期になると自らの精神を制御するのは非常に困難になるように思える。こうしたことから、先のような不登校がきわめて稀なケースであるとは筆者には思えない。島の子どもたちは仲が良いと聞くと、だからこそ、その仲のよい団結力のある少数集団から排除された、あるいはこぼれ落ちてしまった子どもについて考えざるを得ない。現在島によっては少ない就職口を頼りに、いわゆるUターンする20代、30代の青年層も徐々に出てきたようだ。だが、執拗に筆者が尋ねてみると、まったく帰ってはこない学年もあると聞く。その学年における人間関係は今後の島の子どもたちの将来を考えるうえでもしばし振り返ってみる必要があるように思われる⁽¹¹⁾。

それに付随して、保育所や幼稚園から同じメンバーであるために、学年の中の各々の位置関係がはっきりとしていて、それらが再編成される機会があまりないらしい。例えば都市部の地域では上の学校への進学やクラス替えなどを期に、クラスの位置関係が程度の差はあれ再編され続ける。だが、島では同じメンバーであるがゆえに再編する契機がないというのだ。中には中学校になって、突然身長が伸び始めた生徒がクラスのリーダーになっていくということもなくはないが、幼稚園からの位置関係はそれほど一朝一夕で修正されるのは難しいようである。逆に言うと、幼稚園時代の位置関係が非常に重要であるとも言えよう。この弊害として、子どもたちに競争心が

なかなか芽生えてこないという先生方の悩みが生じている。子どもたちは勉強、スポーツなどの各々の領域で序列が明確に示され続けるために、自らの位置を嫌が上でも知ることになり、それは繰り返され続ける毎日の日常生活の中で固着していくのだという。そこから、長年にわたって変わらぬように見える自らのポジションを内面化してしまうことによって、新たな競争を挑もうという姿勢が萎えてきてしまうのではないかと分析する先生がおられたが、このような点も島に内在する問題として指摘できるかもしれない⁽¹²⁾。

母親と教師という二重の役割と島のまなざし

幼稚園の先生方の経験談においても、島に共通の問題が見られた。小学校や中学校とは異なり、沖縄県において幼稚園は公立の場合、市町村立となる。よって、島の幼稚園においては島外への異動はまったくない。南大東島のように保育所と幼稚園勤務を数年単位で交替させるという島もあるが、基本的には教諭自身が辞職しない限りは続けることができるようである。だから、各々の島の幼稚園は長年勤務されている教諭の教育理念を含む「カラー」がきわめて強く反映されているように思われる。各々の「カラー」は各幼稚園の描写に委ねるとして、先生方において、共通のライフコースが見られた。筆者が訪れた島の幼稚園教諭はすべて女性であったが、大半が地元の出身者であり、島での結婚生活を送られていた。そして、既婚者である教諭全員が出産されていた。島内に一つしか幼稚園がない場合、逃れられない問題がここで生じる。我が子を島の他の子たちと同様に担任しなければならなくなるのだ。

すべての先生方が、母親と幼稚園教諭という二つの役割を担わざるを得なかった体験について、あまり心地良くは感じられなかったようである。

まず、家庭外での我が子の行動を間近に見ることができるといえるメリットがあるという。これに付随して、我が子における友人たちとのかかわりを把握できるともいう。以前のフィールドワークにおいて、幼稚園に通園させている保護者から、我が子が幼稚園にいる時間帯は一体何をしているか非常に気になるというような話を聞くことが非常に多かった。このような点に関しては、島の教諭たちにとってはまったく問題ない。

だが、二つの役割の中で、精神的にストレスを感じることも多いようであった。教諭自身が、「他の園児たちと平等に接しなければならない」と過剰に意識してしまうようなのだ。その結果、園児たちが集団で悪さをしていても我が子を真っ先に叱ってしまったり、一番先に目がいってしまったり手が出てしまったりと、冷静に考えてみると我が子に対して必要以上に厳しくなっていたということだった。逆に、周囲の園児たちのことを考えてしまうと、我が子が褒められるようなことをしても褒めることができないということもあったようである。

どちらにせよ、子ども側の視点に立つと、島の中の教師の子どもは非常に損な役回りということになる。そして、最初は一日中母親と一緒にいることを気にしていた子どもの側も、教えられたわけでもないにもかかわらず、先生である場面と母親である場面とを次第に区別し始め、自らもそれに対応した態度を取り始めるという。中には、それを逆手にとって、家庭で「いまは〇〇先生じゃないよね、〇〇先生って可愛いよね」などと母親を揶揄する子どもも見られた。

以上のように、島における教師の家庭においては、親であることと教師であることの場面の転換を子どもに強いることになるわけであるが、他の園児たちにとってはどうであろうか。その他の園児たちにとっては、先生は降園後も先生である。さらに言えば、卒園後も幼稚園の先生である。これは島以外の幼稚園でも自明のことであろうが、島の場合はやや事情が異なる。島の中に

においては、降園後の生活場面においても、自らが幼稚園の教諭であるということを知らない人(とくに子どもたち)と出会うことがほとんどない。つまり、仕事以外の場面においても、幼稚園教諭であり続けなければならないわけである。乱暴に言ってしまうと、先生たちは有無を言わずに、「幼稚園教諭」という役割を島内における全生活場面において強いられ続けるわけである。このためか、先生の中には「島の中ではずっと見られている」という感覚が常にあると述べる方もいた。だが、それは教師のみが「見られる」という一方的な関係だけではない。島の子どもたちも、島の大人たちから見られ続けている。だから、小さい時の評価が必ず付きまとい、すでに出来上がってしまった島内での自己についてのイメージから現実場面において逸脱していくことは非常に困難になっていくように思われた。

このように、大人・子どもにかかわらず、「見られている」という感覚(実際に見られているわけでもなくとも)は島の生活の中でわずかながら居心地の悪さを醸し出しているようだ。このような感覚から逃れるために、週末には沖縄島に行くといったライフスタイルが生まれてきているのかもしれない。

4) おわりに

本稿では、沖縄県離島部である宮古諸島の多良間島、大東諸島の南大東島と北大東島、そして慶良間諸島の渡嘉敷島と粟国島の計5島にある各々の幼稚園における筆者自身のフィールドワークを基にして、幼稚園内での日常をエスノグラフィ的に記述した。そこから、幼稚園への就園率が日本国内でもっとも高い沖縄県の中においても就園率がほぼ100%に近い離島部の幼稚園が抱え込む問題と、そして他の地域の幼稚園との共通性と異質性が垣間見えたのではないだろうか。その姿は少子化で揺れる日本国内の他地域の多くの幼稚園とはまったく異質な様相を呈しているかもしれないが、それらの将来の姿を映し出しているものかもしれない。

だが、本稿は各々の島そして島内の幼稚園の表面をなぞっただけの、ほんのデッサンに過ぎない。本誌掲載の拙稿(宮内:1995b)と同様に、本稿は迅速な報告を心がけて発表したものである。自らで十二分に自覚しているが、あまりにも課題は多い。例えば、「沖縄県離島部の」と標題には大々的に銘打ってはいるが、誇大広告の感は否めない。前述の通り、沖縄県離島部はきわめて広範な範囲にわたっており、以上の5島では到底代表され得ない。具体的には、八重山諸島の島々がまったく欠落している。島に幼稚園が一つあるのは現在のところ波照間島のみであるが、西表島近辺の幼稚園の様子も含めて今後の最大の課題となろう。他にも、伊平屋島や伊是名島といった沖縄島北部の島々も本稿では欠落している。さらに、小宇利島、津堅島、久高島といった沖縄島近隣の島々の事情も抜け落ちている。残された課題の多さのために、本稿においては沖縄県離島部における幼稚園の日常生活のレベルにまで深く踏み込むことはできなかった。ビデオテープに記録された場面のさらなる分析を行った上での別稿を予定しているので、他日を期したい。最後に、今後は以上の島々の幼稚園におけるフィールドワークとともに、沖縄島の幼稚園において、以前北海道の幼稚園で行ったのと同様の長期間のフィールドワークも計画していることも申し添えたい。

謝辞

今回のフィールドワークにおいては多くの方々にお世話になったが、特に以下の方々には大変お世話になった。記して感謝したい。

青柳晃さん、天久仁さん（沖縄タイムス社）、新垣光枝先生（渡嘉敷幼稚園）、大城ちはる先生（北大東幼稚園）、大城尚美先生（南大東幼稚園）、我喜屋なおみ先生（渡嘉敷幼稚園）、島袋梅子先生（多良間幼稚園）、新城常子先生（粟国幼稚園）、高江洲和子さん（沖縄県教育庁）、仲嶺仁介さん（北大東村教育委員会）、長谷川裕先生（琉球大学）、牧隆鏡先生（なかよし塾）、松本恵子先生（粟国幼稚園）、山下千秋先生（南大東幼稚園）。

（五十音順）

とりわけ、天久さん御一家のご好意がなければ今回のフィールドワークは続けることができなかったかもしれません。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

なお本稿は1999-2001年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である（テーマ「幼稚園を基点とする“複数の文化”研究」）。自由な研究を可能にいただいた日本学術振興会特別研究員の制度には改めて感謝したい。

〈注〉

- (1) 自らのスタイルも含めて服装については以前より注意を払ってきた。それは、フィールドワークにおいては服装が決して軽視できぬものであると筆者は考えるからである。例えば、「教育現場をフィールドとした国内初のエスノグラフィー集」と言われる『教育のエスノグラフィー』（志水編：1998）においても、服装について触れているのは拙稿（1998b）と結城論文（1998b）そして宮崎論文（同）のみである。特に宮崎論文においては対象者たちの服装が細かに記述され分析されているのだが、著者本人の服装については知る由もない。聞き取りの場面において、「調査者」がどのような身なりであるかは、その場面を大きく左右する程の影響を与える可能性があることを、これまでの経験から筆者は指摘できる。ましてや対象者が十代の場合、その重要度はさらに増すのではないだろうか。紙面上に現れているフィールドの読者各人によるさらなる分析を行う可能性を少しでも開くためにも、フィールドワークの結果報告においては少しでもより多い情報を提供する必要があるように思われる。フィールドワーカー本人の服装にまつわる記述は、その重要な手がかりの一つなのではないだろうか。
- (2) 著者のこの方法に対しては、相互行為分析研究会のメーリング・リスト上でエスノメソドロジー研究者の水川喜文氏より疑問が提起された。つまり、小型のビデオカメラを固定せずに、持ち歩きながら撮影することが「観察者の視線」を再現することにはならないのではないかという批判である。筆者も水川氏の見解に賛同する。以前指摘したことがあるが、『ストレンジ・デイズ（Strange Days）』（1995年、アメリカ映画）に登場するデジタル・ディスク（他者の体験を視覚・味覚・聴覚・臭覚・触覚という五感から感情に至るまで忠実に再現できるという設定のディスク）でもあるまいし（宮内：1996）、たかがビデオカメラごときに「観察者の視線」を忠実に再現できるはずがない。そのような共通の理解を基にしながら、むしろその先を考えたい。すると、このような共通の理解を基にしながらも、その先は二手に分かれていくのかもしれない。ビデオカメラによる「観察者の視線」の完全なる再現はあり得ない。だからこそ、エスノメソドロジーという共通の方法に基づいたエスノメソドロジストにとっての共通のリソースが必要とされる立場が現れるのであろう。一方で、一人ひとりの個人に意味

を見出し、なおも個人の固有の〈記憶〉を頑なに信奉し続けるという立場もあろう。後者の立場ならば、自らの〈記憶〉のある程度の正当化を図るために、上記のように小型ビデオカメラによって撮影する方法も必要とされるかもしれない。筆者は後者の立場に近い。

- (3) 近年、かつて語られ続けてきた島の「孤立性」や「閉鎖性」というネガティブな側面を留保し、逆に「開放性」といったポジティブな特性を強調する語りが多くなってきたように思われる。

しかし、実際に島嶼部におけるフィールドワークを体験すると、そのような語りに対してある種の違和感を感じ始めた。以下は、一人の旅行者として5つの島を訪ね、その島の縁に立ちながら考えてみた私見である。詳細は別の機会に譲るが、ここでは一点だけでも書き記しておきたい。果たして島は開放的なのかという問題である。筆者は、二つの視点から違和感を覚えた。

まずは、島にとどまる者の視点から。

島は全方位的に海に取り囲まれている。ということは、どこから得体の知れぬ他者がやってくるのかわからぬ危険に始終冒され続けているということになりはしまいか。そのような怯える者にとっては、海は豊かな生命の源ではなく、自らを犯す何者かをいつ運んでくるかわからぬ恐ろしい媒体と言えはしないだろうか。島は「開かれた空間」だと見る者の視線は、筆者にとっては「見られる側」であるという意識を捨象してしまった「常に見る側」の主体の視線であるかのように感じられる。さらに、それは「犯す者」の視線だと言ってしまえば、あまりにも乱暴だろうか。

次に、島から旅立とうとする者の視点から。

本当に島は「開放的」なのだろうか。海岸や岬から海をずっと見続けていると、安らぎを覚えるどころか、自らの身動きの取れなさに不安を覚える。この不安は、島嶼社会を意識せずに生活してきた者特有の感覚だろうか。あるいは筆者のみの特殊な感覚だろうか。筆者は、島内の生活において、どこにも行けないという不自由さを感じた。この筆者の感覚は、四方の島々や大陸に行ける自由さというのが、交通手段の保有が前提となっていることを明らかにしてくれた。つまり、船や飛行機などの移動に用いる何かを有していて、初めて可能となる。「開放的」な島々という新たな提起は、移動手段を有していない者、その手段から疎外された者たちにとっては、空想的な「ユートピア」として映るのではないだろうか。しかも、仮に有していたとしても、広大な海に対して踏み込んでいく者たちは、海に対して恐怖感を抱かなかったのであろうか。それほど島々は「勇者」ばかりで満ち溢れていたのか。目の前に広がり続ける広大な海を、筆者は「怖い」と感じた。

このような感じ方を、島で生活する人たちの誰一人として、してはこなかったのだろうか。筆者にはどうしてもそうは思えない。現在における島に対するポジティブな語り方は、そのような島の中の「弱者」の声を消し去っているとは言えないだろうか。

- (4) ただし、この人口の中には多良間村に含まれている水納島の人口も含まれている。
- (5) 「八月踊り」に関しては、ここ30年近くに限っても幾つもの論文がある。主なものとして、「八月踊り」の地域における差異を調査した内田論文(1980)、「八月踊り」の呪術的背景を考察した大石論文(1990)、一つの集落の踊りを丹念に記述した内田論文(1990)、伝統が現在においてつくられていく様を分析した中原論文(1996)などである。しかし、すべては奄見諸島において伝えられている「八月踊り」であって、残念ながら多良間島における「八月踊り」ではない。筆者が知る限りでは、奄見諸島における「八月踊り」と多良間島における「八月踊り」は異なっているようだ。現在の「八月踊り」とは異なるようだが、多良間島における豊年祭について書かれたものとして河村(1999)がある。
- (6) この女兒はこのように答えたが、筆者が札幌に帰った後で先生に教えていただいたところでは、女兒は踊ってはならないという決まりはないらしい。先生の解釈では、これらの男児たちは非常に上手に

踊るので、女兒たちは自分たちが踊るのを遠慮しているのではないかということだった。ちなみに、「女の子は踊らんの？」という地元のアクセントを真似た筆者の発言を生み出した筆者自身の認識は間違っていたことが明らかとなった。窓のカーテン付近で数人の女兒が座っていたのだが、筆者にはただ座って見ているように見えた。だが、先生によると、八月踊りには幕引き係の男性が必ずいるのだが、かの女たちはその役目を演じているらしかった。八月踊りは最初男性だけの踊りであつたらしいが、近年は女性も舞台に出て踊るようになったらしいということである。

- (7) 筆者が訪ねたとき、ハンディキャップを背負った園児たちは検査のためなどに理由によって、南大東島を離れていた。
- (8) 「あんまく」とは、島に生息する「ヤシガニ」のことであるらしい。北大東島幼稚園に本稿の草稿をお送りしたときに、大城先生に教えていただいた。ちなみに、各々の幼稚園に関する記述部分は各々の幼稚園にお送りした上で、公表することに関して了承を得ている。「あんまく」については、河村(1999)により詳しい記述がある(河村:1999, 421頁)。
- (9) 元教育長の小嶺盛仁氏の記述によると、正確には、1946年に村内の初等学校に幼稚園が付設され、渡嘉敷幼稚園も設置されたが、政府補助金の打ち切りより運営が困難なために1949年一旦廃園になったということである(『20周年記念誌』より)。
- (10) そのように見ようとする私たち「ヤマト」のまなざし、そしてそのまなざす欲望について考えてみたい。近代日本の植民地政策から生み出された調査研究の視線は遠い「過去」のものではなく、今なおしっかりと多くの「ヤマト」の人たちの視線を拘束しているようだ。「今の私たち」とは異なるが、「かつての私たち」としての島の人たち。「同根」であるというイデオロギーを立ち上げるために、どうしても現在の姿は異なった存在でなくてはならないという二重のまなざしに、島の人たちは頼みもしないのに晒され続けてきたように思われる。つまり、「ヤマト」の近代化を合理化するために、島の人たちは「近代以前の役割」を無理やりに担わされてきたとも言えるだろう。今さらながら柳田國男ブームでもないだろうが、琉球弧の島々に「原日本」を探す作業は、今流行の「自分探し」に似て何も見つからないのではないだろうか。「青い鳥」の童話のように、自らを振り返り、自らと向き合うことしか術はないのかもしれない。
- (11) 島には地元出身の男性は戻ってくるが、女性に戻ってくる場合はきわめて少ないとしばしば耳にした。以前指摘したように、ここでもどうやら家族の居住地は男性によって決められているようである(宮内:1995a)。
- (12) このような話をうかがっていた筆者は、沖縄県離島部のみならず、日本国内のすべての子どもたちを説明する流行の言説に酷似している点から、日本国内に居住する子どもたちにとっては自らの生活世界がいわゆる「離島」のように感じられているのではないかとさえ思えてしまう。

引用及び参考文献

- 安達正嗣 1988 「E. ゴフマン『島の社会におけるつきあい行動』の再検討」『ソシオロジ』101号, 109-120頁.
- 網野房子 1991 「離島社会の存立とその要件—五島の事例から」『民族学研究』第56巻3号, 308-319頁.
- 網野善彦 1997 『日本社会の歴史(上・中・下)』岩波書店.
- 内田敦 1990 「奄見大島笠利町字宿の八月踊り」『民俗芸能研究』11号, 73-88頁.
- 内田り子 1980 「『八月踊り』の地域性—『でっしょ』をめぐる—」『人類科学』33号, 1-39頁.
- 大石泰夫 1990 「八月踊りの始源—奄見大和村の事例から—」『民俗芸能研究』11号, 1-20頁.

- 沖縄タイムス社編 1998『こどものいる風景 沖縄社会を見つめる』沖縄タイムス社.
- 鹿野政直 1988『「鳥島」は入っているか — 歴史意識の現在と歴史学 —』岩波書店.
- ガブリエール・アンチオーブ&網野善彦&海老坂武 1998『〈海〉から歴史を読みなおす — カリブ海・日本海・地中海』複数文化研究会編『〈複数文化〉のために — ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』人文書院, 11-32頁.
- 河地貫一 1967『離島社会の後進性とその歴史的展開』長崎大学経営学部研究会編『経営と経済』109号, 1-44頁.
- 1968『離島地理学の方法論に関する一試論』長崎大学経営学部研究会編『経営と経済』112号, 43-68頁.
- 河村只雄 1999『南方文化の探究』講談社(初出は1939&1942).
- 姜尚中 1996『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店.
- 宜保美恵子 1985『沖縄県幼児保育史(第1報) — 明治・大正・昭和初期を中心に —』『琉球大学教育学部紀要(第二部)』第28集, 149-165頁.
- 1986『沖縄県幼児保育史(第2報) — やえやま幼稚園について —』『琉球大学教育学部紀要(第二部)』第29集, 325-353頁.
- 1987『沖縄県幼児保育史(第3報) — 太平洋戦争期の保育事業について』『琉球大学教育学部紀要(第二部)』第30集, 167-192頁.
- 志水宏吉 1996『臨床的学校社会学の可能性』『教育社会学研究』第59集, 55-67頁.
- 1998『教育研究におけるエスノグラフィーの可能性 — 「臨床の知」の生成に向けて』同編『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院, 1-28頁.
- 編 1998『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院.
- 知念勤子 1997『沖縄県の幼稚園設立とその基盤形成に関する一考察 — 「ヤエマ幼稚園」の事例を中心に』『沖縄教育研究』5号, 11-18頁.
- 富山一郎 1999『ユートピアの海』春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』世界思想社, 204-225頁.
- 中原ゆかり 1993『奄見八月踊りの「現在」性 — 舞台化・伝統・アイデンティティー』『民俗芸能研究』17号, 1-28頁.
- 中俣均 1995『辺境性の重層 — 離島が語りかけるもの』『地理』40(9), 62-66頁.
- 中山満 1974『沖縄の離島の地域概念 — とくに離島振興において —』『琉球大学法文学部紀要(社会篇)』17号, 113-142頁.
- 1975『南大東島開拓の発展過程 — 島嶼の地域形成の事例的研究 —』『琉球大学法文学部紀要(史学・地理学篇)』18号, 73-103頁.
- 1992『復帰後の離島生活の変化』『地理』37(5), 21-27頁.
- 新原道信『島嶼社会論の試み — 「複合」社会の把握に関する社会学的考察 —』『千葉大学人文研究』第21号, 151-179頁.
- 日本離島センター編 1998『SHIMADAS』日本離島センター.
- 浜名陽子 1983『学校・学級に関する民族誌的研究 — その系譜と意義 —』『教育学研究』第50巻2号, 202-210頁.
- 複数文化研究会編 1998『〈複数文化〉のために — ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』人文書院.
- 宮内久光 1998『人口増加島嶼地域 — 沖縄県座間味村における県外出身者の存在形態』『地理科学』53(4), 283-296頁.

- 宮内洋 1995 a 「小樽手宮地区の高齢者の個人史から見たパラダイムの変容と継承」文部省科学研究費補助金研究成果報告書『青年期発達と〈家族-学校-企業のトリアード〉に関する社会学的基礎研究』, 7-14頁.
- 1995 b 「北海道における外国籍園児の現状 — 幼稚園に対する聞き取り調査をもとに —」『北海道大学教育学部紀要』第68号, 177-190頁.
- 1996 「きわめて私的な“社会情報学” — 社会情報学におけるもうひとつの展開 —」札幌学院大学社会情報学部大國研究室編『大國ゼミナール論集』創刊号, 6-8頁.
- 1997 「外国籍園児が在籍する北海道の幼稚園」『子ども学』17号, ベネッセコーポレーション, 116-123頁.
- 1998 a 「外国籍園児のカテゴリー化実践」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房, 187-202頁.
- 1998 b 「『韓国・朝鮮』籍の子どもが通う日本の幼稚園 — エスノグラフィー的記述におけるひとつの試みとして —」志水宏吉編『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院, 151-171頁.
- 1998 c 「『〈単一民族〉教育』における二重の困難」シンポジウム「在日朝鮮人教育から多文化共生教育への回路を求めて」報告レジュメ (ホテル・アウィーナ大阪, 12/05/98).
- 1999 「〈現実〉のつくり方 — ある子ども同士の『けんか』に見る説明の妥当性について —」第2回相互行為分析研究会報告レジュメ (北海道大学, 01/23/99).
- (印刷中) 「『多文化保育・教育』とクラス編成」『保育学研究』第37巻第1号 (特集: 幼児の多文化教育) 日本保育学会.
- 宮崎あゆみ 1998 「ジェンダー・サブカルチャー — 研究者の枠組みから生徒の視点へ —」志水宏吉編『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院, 275-301頁.
- 宮本常一 1969 『日本の離島第1集 宮本常一著作集4』未来社.
- 1986 『旅にまなぶ 宮本常一著作集31』未来社.
- 1986 『離島の旅 宮本常一著作集35』未来社.
- 目崎茂和 1984 「南大東島 — 孤島の歩みと暮らし」『季刊民族学』8(2) 76-87頁.
- 結城恵 1998 a 「幼稚園で子どもはどう育つか — 集団教育のエスノグラフィ」有信堂 高文社.
- 1998 b 「教授・学習の集団的文脈 — 目に見える集団と目に見えない集団 —」志水宏吉編『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院, 123-147頁.
- Cummings, W. K. 1980 *Education and Equality in Japan*. Princeton Univ. Press. (友田泰正訳 1981 『ニッポンの学校』サイマル出版会).
- Goffman, E. 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*. Doubleday Anchor. (石黒毅訳 1974 『行為と演技 — 日常生活における自己呈示』誠信書房).
- Hendry, J. 1986 *Becoming Japanese: The World of the Pre-school Child*. Univ. of Hawaii Press.
- Lewis, C. C. 1995 *Educating Hearts and Minds: Reflections on Japanese Preschool and Elementary Education*. Cambridge Univ. Press.
- Peak, L. 1991 *Learning to Go to School in Japan: The Transition from Home to Preschool Life*. Univ. of California Press.
- Rohlen, T. P. 1983 *Japan's High Schools*. Univ. of California Press. (友田泰正訳 1988 『日本の高校』サイマル出版会).

参考資料**沖縄県全体**

『平成10年度学校一覧』（沖縄県教育委員会，1998）.

多良間島

多良間小学校創立100周年記念事業期成会記念誌編集委員会編 1993『多良間小学校創立100周年記念誌』

多良間村立多良間小学校.

瀬戸口清文 1996『セトちゃんのうんとこどっこい運動会Ⅵ』メイト.

南大東島

『平成10年度教育計画』（南大東村立南大東幼稚園，1998）.

『村勢要覧』（南大東村役場，1998）.

『南大東村学力向上対策委員会実践集録』（南大東村学力向上対策委員会，1998）.

北大東島

『平成10年度幼稚園教育』（北大東村立北大東幼稚園，1998）.

渡嘉敷島

記念編集委員会編 1995『渡嘉敷幼稚園創立20周年記念誌』渡嘉敷幼稚園創立20周年記念事業期成会.

新垣光枝編 1997『たんぼぼ』第1号，渡嘉敷幼稚園.

——編 1998『たんぼぼ』第2号，渡嘉敷幼稚園.

『せんそうのこと』（渡嘉敷幼稚園年少組，1998）.

『せんそうのこと』（渡嘉敷幼稚園年長組，1998）.

粟国島

『平成10年度教育計画』（粟国村立粟国幼稚園，1998）.

『平成10年度粟国村学力向上対策実践発表会』幼稚園部会報告レジュメ（粟国村立粟国幼稚園，1999）.

『コーラルウェイ』71号（日本トランスオーシャン航空，1999）.